「チユニス」客舍重陽

小少離懷家國憂　遠遊幾背故園秋
今朝偶值重陽節　遙憶雙親獨倚樓

遙寄在佛京白井大佐(從「チユニス」國)

三旬踏破六州塵　到處山河艱性眞，
今夜中秋月若鏡　忽思廟畔談兵人
(廟畔謂拿破翁廟
曾與大佐廟畔談兵)

亞剌比亞人

日出而耕日入休　金權帝力非吾求
椰子叢畔擁駝睡　自擬漠中萬戶侯

悼曾禰西湖子衛滿去(見佛國新紙電報)

想昨湘南告別時　慇懃贈我自重辭
辭猶有耳人今喪　一片訃音不勝悲

北亞非利加客中看初秋明月

西來一萬八千程　漠北初秋分外清
明月今宵人盡望　雖同遊子天涯情

「カルセージ」墟址想漢尼破將軍

最憐末路漢尼破　空抱雄圖奈北氛
遺恨二千一百歲　城頭猶覺蔽愁雲

地中海の武士島

（マルタの要害）

九月二十八日於羅馬

パレッタに入る上マルタの現在—マルタの過去—聖ジョンの騎士—パレッタの一瞥

パレッタに入る

北部亞非利加の地を踏む千七百餘哩、西、モロッコに至りて太西の怒濤に浴し南、サハラの大漠を衝き東、トリポリーの境に臨んで漠邊の勁氣を吸ひ得たれば、月の廿一日後四時マルセーユ、チユニス、マルタ間の定期船カルセージ號（佛國トランス、アトランチック會社所有船）に搭じ一先づ亞非利加を離れマルタシシリーを經て以太利に上陸し一直獨逸に向ふことゝせり

佛國人の經營地、アラブ族の住む所、古文明の一大博物館たる北亞三州の地は頗る余の意に適し稍棄て去り難きの感もありたり、試みに想へ、其名も床しきカルセージ號に投じ、二千年前に築きし運河（勿論新に修築し擴大したれども）に依りてチユニスの内港を出で、カルセージ市の遺址を左に眺むる時、日漸く沒せんとして暮靄遠きより到り、聖、ジョーン寺の尖塔白雲を横ふるの邊、人をして座ろに二千年前の文明を學ばせしむるに非ずや、特にハンニバルが嘗古の驍將として赫々の武勳に羅馬を震動せしめしも、末路國外に流寓し空しく雄圖を抱いて母國の衰滅を慨し、遂に毒を仰いで死せしの一段に至りては後人をして一層の同情を惹かしむ、げに彼が回天の志を抱いてカルセージに歸來するや農工を奬め武術を練り妖氣を一掃せんと擬せしも、事志と違ひ暗に紛れて故郷を逃れ出で放浪の身となりしは、かの尖塔の邊なりしなり、斯くて余は舷頭に出でゝ沈思に耽りつゝある間に明月海東より上り

來りて狂波を照らし、悽愴の感は轉じて粟宿の景となり、海賊横行の當時を想ひ抔しつゝ眠りに就く、明くれば二十二日拂曉汽笛に驚かされ蹶起甲板に出づれば船は既に地中海を北に過ぐる百七十餘哩、マルタ島に沿ふて航行しつゝあり、首港バレッタの「グレート、ハアボア」に投錨せしは正に前七時。

マルタは地中海の要衝に當り古來地中海の制海權を握らんとする邦國必爭の地、現に英國が據つて以て覇を海上に稱する所たるは贅言を待たず、從つて要塞堅固にして出入の客を檢するの嚴なるジブラルタルに過ぐるを思はしむ、船の港内に投錨するや吏員來りて一々乘客の國籍、姓名、用務等を問訊し萬一の遺漏なきを期しつゝあり、余は單に通過の漫遊客なるが故に國籍、姓名と上陸後の宿所、出發の時間を問はれたるのみにて直に放免せられしが、マルタ劇場に出稼すと見ゆる一女優の如きは頗る嚴密の身元調べを受け居たり。

上陸直に名所古蹟を尋ね總督府、博物館等を一瞥し更に島内唯一の狹軌鐵道に依り島の中央に位する舊都シタ、ベチア(バレッタより七哩)を訪ふてサラセン人築く所の城砦、カタコンブ等を見物し、同夜半、出帆の伺牙利汽船會社持船アドリヤ號にてシシリー島のシラキユースに向へり、マルタに在る僅に一日、而も莫大の地、見るべきものは之を見盡したり、其現狀に於て、其歴史的懐古に於て、特に中古時代に於て勇敢なりしナイトに就て旅客の感興を惹くもの極めて多し、地中海沿岸を視察せん程の者は必ず此島を訪はざるべからず、而も邦人の到るもの殆んど稀なるを知るに及んで聊か其狀況を略報すべし。

マルタの現在

マルタ群島はマルタ、ゴゾ、コミノ、コミノトの四島嶼より成り、シシリーの南、約五十六哩、亞非利加海岸を距る約百八十七哩に在り、地勢よりせ

ばシシリーに屬すべきもの、就中マルタ本島は長さ二十哩、幅九哩半あり、面積約九十八平方哩、ゴゾは長さ十哩、幅五哩半コミノは長さ一哩半、幅一哩四分の一、コミノトは更に小なる無人島にして併せて總面積約百二十平方哩を算す、マルタの最高點は八百四十餘呎あり、人口約二十一萬三千(昨年三月の調査)中、一萬は英人其他は英人以外のものなりと云ふ、尤も此外に約一萬の英兵常に駐在す、海上より望めば岩石突兀として些の青色なく上陸して内地に進むも滿目赭色の土砂のみにして地味瘠せ農耕に適せざる如きも、人力能く天然を征服し到る處殆んど耕されざるの地なく氣候亦頗る暑く五六月の交、牧草又は穀物を收穫したる後、棉花を栽培するを常とし、馬鈴薯も多く植付けられ年に二回の收穫あり、耕作面積約四萬二千エーカー穀物棉、馬鈴薯の外に橙、蜂蜜、葡萄、無花果を產し木綿、金銀、絲細工の製作熾に行はれ、又マルタ、レースは土產物として有名なり。

輸入は固より輸出に倍加し最近五箇年間の統計は左の數字を示せり

輸入	輸出
一九〇五年九、七三五、八五九磅	一一五、三三九磅
一九〇六年八、三八八、四九二	一二五、四五三
一九〇七年七、〇九六、八〇〇	一二三、五一〇
一九〇八年六、九八三、五八九	一五九、四三六
一九〇九年六、二七三、〇四九	一二〇、三三六

政廳の歲入は近年の平均額四十六七萬磅を上下し、關稅、地料、郵便電信、免許稅等の收入に屬し、歲出も略歲入と其額を同ふし、何等本國より財政上の補助を仰がず、公債亦八萬磅に滿たざるの好狀況に在り。

昨年三月の調査に據るに教育も亦頗る發達し、公立小學校の數百六十一、生徒二萬二千餘、中學校二、男女學生約三百餘、技藝學校四、大學一、其學生百六十餘あり、外に私立學堂五十九、生徒三千を算すと云ふ。

地中海防禦總督の駐在地たるを別にしてマルタの政治組織は軍務知事制なり、千八百年此島の英領に歸せしより同十三年迄はシヴァル、コムミッシヨナーをして統治に任せしめたるも同年よりして知事制となり爾來約一百年、人を代ふること現任知事ランドル中將に至る迄十有九回、悉く武官を以て之に充て、文官にして本島の知事となりしは千八百四十七年乃至千八百五十一年間に於けるオフエラル其人のみ、文權發達の著しき英國に在りて武官制を採れるは此島の特殊なる軍事的地位に依るが爲めか。

知事は勿論島内行政の全權を握り、助くるに行政委員會及び立法委員會あり、立法委員會の會長は知事にして副會長は副知事之に當り、九人の官吏、八人の民間より選擧されたる委員(内七名はマルタ、一名はゴゾ選出)より成り、行政委員會は高級武官及び立法委員會委員の主なるものより成り、民間選出の委員も二名丈けは最近に於て之に參加すること

となれりと聞く、而して法廷に於ける公用語が猶以太利語なるは以て英國自由主義の餘波と云ふべく、而も兒女を學校に登すに當り其兩親は英、以兩國語何れかを選定するの權利を有し、昨年度に於ける統計は英の九十六「パーセント」牢に對するに以は僅に三「パーセント」牢なるを以て推せば英語を以て公用語と爲すべき自然の必要に迫らるるの日蓋し遠からざるべし、さるにても一寸他の殖民地に例の少き英國一流の措置と云ふ可し。

マルタは一平方哩の人口二千以上にして世界に於ける最も稠密の所にして其種族はフキニシヤ人に源を發し、以太利語を語るもの多きも語系よりせば最も亞拉人の遺傳を享けたるものと云ふべく、現在のマルタ語の八十「パーセント」は亞拉比亞語の轉訛なりと云ふ、宗教は全然加特力にして僧侶の數二千に上り即ち二十家族に一人の割合にして寺院到る所に存在し其勢力も從つて強大に、全島土地の約四分の一は

僧侶の有に屬すと聞く、而も英國の放任政策を採れる、此等の僧敎に干渉せず、其族又早婚の俗あり敎會にては十四五歲の少年男女の結婚を許し、所謂丁年未滿の若夫婦を見ること屢々に小兒の死亡率頗る多きの弊あるも英人は之にも干渉を試みず、某米人をして『英人の百年間にマルタに施せし善政は米人の五年間に比律賓に爲せしものに劣れり』と叫ばしむるに至る、英人の志や蓋し區々此島の利源を開發し此島の人民を向上せしむるにあらずして此島の要害に據りて世界的帝國の地位を維持するに在るか、何ぞ夫れ放任の甚だしき。

マルタの過去

バレッタの博物館に陳列せられたる古器を見れば耶蘇紀元前千年代に於て既に此島民が銅器時代の文明に在りしを察すべく、又最近發掘せられたるカタコンブも慥に有史以前のものならんとは博物館員の

余に說明せし所なり、ホーマーに所謂オギシヤ島とは此島のことたるが如く而してフォニシヤ人は有史以後に於ける最初の移住者と云ふを得べし、此島の形勝は斯くて忽ちにして地中海に於ける商業の中心となり、續いて紀元前七百年代希臘人の來り住するあり、フォニシヤ、希臘兩種族の遺跡は今猶島內の古趾、カタコンブ等にて立證すべく、希臘人去りてカルセージの手に入りしは紀元前四百八十年に在り、カルセージ時代に於ける繁榮は羅馬人の視線を惹き第二ピユニック戰爭の交、遂に其手に歸せり時に紀元前二百十五年なり、羅馬人はマルタを羅馬の一ミユニシパリチーとしてマルタ人を厚遇し、其法律を尊重し其製造業を奬勵し、自己の貨幣を鑄、自己の法令と裁判とを以て施政せしめ、以て多年カルセージ人に懷柔せられたる此島民を綏撫するに全力を傾けしが如し、彼の聖パオルが難船して此島に上陸せしは紀元後五十八年にして島民の基督敎徒と爲りしはパオル布敎の結果なり。

後バンダル、ゴッス等の手に落ち更に八百七十年サラセン人の征服に遇ひ其治下に在る二百二十年、此間彼等はシタ、ベチタの城砦を固め當時に於ける難攻不落の要害となしたるは現に其遺址の嚴然たるを見ても想像すべく、彼等の此間に於ける痕跡は最も其言語に於て認むべきは蓋に既に之を述べたり。

ノルマン人のシシリーを征服するや此島も亦其手に歸し島民は喜んで之を迎へたるが如く、(千〇九十一年)第一世ロジャー死し其兒孫相享けしが、姻戚關係よりして六十七年(一一九九—一二六六年)間獨逸帝の配下となり次に佛人の略取する所となり、更に西班牙の有に歸し幾回か其主を代へて兵戈止んでは又起り殆んど寧日なかりしが、千五百三十年西班牙のカール、キントウ即ちチャールス五世の時に至り法王クレメント七世の要請に依り此島を聖ジョーンの騎士の手に渡し茲に有名なる地中海の武士島の名を後世に冠せらるゝに至りしなり。

聖ジョーンの騎士(ナイト)

第一代グランド、マスター(島主の稱號)アダムの其部下騎士を率ゐて此島の主人となりしは同年十月の二十九日にしてシタ、ベチタを居城としたり、第一代アダムより島主を代ふる二十七、千七百九十八年ナポレオン帝の占領に歸せし迄歴代相繼ぎて島主の治に服し、此間外敵に對し獨立を保維したる勇敢の事蹟は頗る後人の追慕に値す。

彼の土耳其のソリマン大帝が豎子侮り難きを見、大軍を派して一氣に全島を屠らんとせしは千五百六十五年の出來事にして、當時の島主パレット以下島民は協心戮力、此大敵に當り奮鬪屈せず敵の三將と二萬の兵を斃し、島民亦九千を失ひたるも幸に孤島に據り名譽の勝利を博せしを以て遠近傳へ聞きて其武名を賞揚し、西班牙のヒリップ帝は特使を派し贈るに寶劍を以てし、法主ピアス五世亦島主パレットに僧正

の冠を與へたり、後島主は益々要害を築くの必要を認め今のバレッタ港を本陣とし之に要塞を築造せり、蓋しバレッタは島主の名を以て之に命せしもの、眞にバレットは歴代島主中最も後人の崇敬に値する男なり。

ナポレオンの佛國に嵬起するや、此島を占有するの必要を認め千八百九十八年六月兵艦を率ゐて此に臨み、遂に島主以下を降してバレッタに上陸し約一週間今の郵便局の建物に滯陣せしも、固より久しく此小島に淹留すべからざるを以て守將を留めて凱旋せしに、マルタ人は援を英將ネルソンに求め英軍と聯合して佛軍に當り、佛軍能く之に堪へしも衆寡敵せず且つ糧食盡き、遂に九月八日を以てバレッタを英人の手に渡せり越へて千八百〇一年英將ピゴットは宣言を發しマルタ島の英領に歸せしことを公布し、次で同十四年の巴里條約第七條に依り列國の形式上の承認を得、爾來百餘年、英國の地中海に於ける要害としてジブラルタルと共に難攻不落の稱あるは人の克く知る所、有名なるマルタのナイト政治は斯くして時代の變遷に依りて其終りを告げ一片の碑文

"The voice of Europe and the love of the Maltanese confirm these Islands to the Great and Invincible Britain"

は永く英國占領の第一日を語るに似たり、ナポレオンの本陣たりし今の郵便局の建物には其旨を石壁に刻みあり、土耳其軍侵入の繪畫も多く博物館に陳列しあり、歴代グランド、マスターの用ひし武裝、勳章等も一齊に陳列せられ行客の追想に便ならしむ。

バレッタの一瞥

首港バレッタは人口約三萬、天然の良港にして試みに稅關の上なる二百尺の高臺ピアッザ、レジナ遊園に登りて眺望せんか、港の内外指顧の

中に在り、特に日沒の光景最も壯絶なり、聖ジョーン寺院は以て當年ナイトの勇武を記念し、島主の居城たりし建物は市の中央に在り現に地中海防禦總督の居住と化し、街頭往來の婦人が回教徒の如く黑色の布片にて頭部を掩へるは此島宗教熱の猶激しきをトすべく、夜幻燈を見物して兵士の多きに驚き、島民の言語のアラビヤ語に類せるを聞いて其潜勢力の大なるを想ひ、而して全市の武裝的にして一大堡壘然たるを見ば所謂武裝的平和の現象を眼前に證明すべし、英本國に入りて其自由の空氣に浴し其領土に到りて自由港の愉快を感じたる旅客もジブラルタルを訪ひ此島を過ぎり初めて英人の武的組織の半面を窺ふを得んか。

曉入馬太灣　又過大漠不毛間
既上北洲處々山　夢裏入來馬太灣

海洋波靜船如矢

以太利より獨逸

地中海の武士島に多大の感興を惹きし余は翌二十三日シシリー島のシラキユースに上岸し旅亭に就き最初の食卓に先づマカロニーの美味を喫し身の以太利の境に入りしを切實に感じたり、以太利は古羅馬の地、歐洲文化の淵源として致る處懷古の情を滿足せしむべし、シラキユース郊外にも羅馬時代の遺跡極めて多く圓形劇場にカタコンブに總て旅人の徘徊去り離きの所、シラキユースを去りカタコヤに硫黄業を視、エトナ火山の壯觀を右にしつゝメシナよりフユリーにて海峽を渡り以太利本土に入り縱に北行ナープルスを經て廿五日羅馬に着し直に大使館に林大使を訪ふ、西班牙出發以來始めて日本人に接し日本の新聞を讀み意快然たりしも梅博士、青山子爵の訃を知りて痛惜の念深し。

羅馬に在る五日、日夕市中市外に名所古跡を巡討して昔を偲ひ又當局官憲と會して新以太利勃興の要素を探り、フロレンス、ベニスを經、ミランにて國際飛行機競技會を參觀し北部以太利の沃野を横ぎり瑞西の山國を衝きて獨逸に入りミユンヘン、ライプチヒを經て十月四日伯林に着せり。

伯林は曾て久しく在留せし所、彼の街此の街未だ多く記憶より脱せず直にルイトポルト街に假寓を定め此に居ること一箇月に及べり、曾遊首を回らせは屢に七年に過ぎざるも當時の同遊今に在るもの畑參事官、伊藤海軍大佐、辻東洋語學科講師の三氏のみ、而も余が在伯中に成立せし日本倶樂部は其居を轉じたるも看板は依然として存し、正しく余が七年前倶樂部の委員たりし時に自書せし惡筆なり、聞けば基金一萬馬克に上れりと、倶樂部の發展は則ち在留邦人の發展を意味す、又一日ウオルムサー街に舊下宿の老婆を訪ふ、健在にして狂喜余を迎へ當年を

談じて刻の移るを覺へず、當時十二三歳なりし秘藏の一人息子も既に二十前後となりて逞しき骨格、立派の成人となり某銀行に奉職せりと、是れ共に喜ぶべきなり。

或は伯林大學百年祭に際して獨逸青年活動の起因を察し或は碩師セーリング、シュモラー諸博士に見へて所見を正し、或は獨逸第三回殖民會議に列して獨逸殖民政策の成敗を講じ、或は獨逸殖民協會の會員となつて研究の端緒を啓き得たり、倫敦と伯林の滯在各一ヶ月は今回の遊征の安息時代にして又旅行準備時代たりしなり、以太利より獨逸、語らんと欲すると多きも暫らく筆を玆に擱き巴幹に歩を進めんかな。

想以太利「ガルバルヂー」將軍（於羅馬府）

超絶世間名利塵　將軍行藏恰如神
剉將俠骨傳千載　半島國中第一人

其二

朝爲將帥夕俘囚　榮辱回頭如換裘
斯老所取只俠骨　功成南島伴閑鷗

雨後入伯林

凉氣侵肌雨後天　染黃山色一層鮮
同遊只恨人今散　回首春秋歷七年

十一月三日モンテネグロ新王國首都の露中にて

ダルマチヤ沿岸の勝

巴幹の再遊＝維也納の八日間＝使館の天長節＝維也納と伯林＝獨皇儲隨員と同車＝多島海に浮ぶ＝以太利語の勢力＝獨逸語の勢力＝ダルマチヤ地方議會＝ポーラとシロッコ＝ポーラ瓶港＝以太利人市街＝スパラト＝ラグサの勝＝海角の一小共和國＝古來血戰の悲＝カタロに上陸＝山下の兵村

巴幹の再遊

巴幹の名が歐洲の禍源として邦人の耳に熟せるや久しく、今日も猶依然歐洲の禍源たり、土耳其の歐洲の土を見棄てざる限り、巴幹列邦の統一せられざる限り、而して統一の殆んど不可能なる限り、巴幹は永く將來の禍源たらん、土耳其國政の常に危道を踏みて不定なる、希臘の現勢、

クリート問題、何れか禍源ならざる、マセドニヤの叛亂、アルバニヤの暴動、セルビヤの內治、ブルガリヤの外政悉く是れ禍源なり、余の前に歐洲に留學せるや明治三十四年一たび巴幹の二邦（ボスニヤ、ヘルツエゴビナ）土耳維羅（ルーマニヤ）馬尼の一端を訪ひしことあるも、其目的匈牙利の踏査に在りしを以て、普く巴幹の內地に入る能はざりしに、越べて二年滿洲問題の極東の天地を震撼しつゝある頃、途を露國に取りオデッサより黑海を過ぎて土耳其の首都に出で小亞細亞の北部を廻り更に歐土、勃加利（ブルガリヤ）及羅馬尼諸邦を視察せしことあり、故に今回の遊之を第三遊と稱するは聊か僭なり、以て再遊となすを得んか。

七年目に歐洲に至り英、佛、以諸邦を過ぎて東し南して獨逸に來り墺匈國を過ぐるに、巴幹の問題は日として新聞の電報欄に上らざるなく、特に維也納を過ぐるに及び之を耳にすること頻りに、列邦の國境に哨兵の衝突を見ると今猶昨の如く、最近に於ける土耳其の外債は列强の視

聽を傾注せしめ、土耳其と羅馬尼の同盟問題、希臘内閣の更迭、塞耳維王儲の大患等總て利害關係ある列强の注目を怠らざる所にして我東邦の諸問題の如き殆んど彼等の話題に上らざること今猶昨の如し、是に於てか再遊の念更に切なるものあり、斯くて維也納に在る八日間專ら巴幹旅行の準備に費せし余は、去九日の夜行車に投じてトリエスト港に出で昨夕を以て當地に入りしなり、即ち墺國の首都を發し唯一の商港トリエストより歐洲沿岸の勝景に於て第一と稱するアドリヤチック の多島海に浮びダルマチア州に沿ふて南下しカタロ灣に上陸、四千餘尺の險崖を越へて黑山國（モンテネグロ）の首都を一瞥し引返してカタロより墺匈國の新領土たるヘルセゴヴヰナ州よりボスニヤ州に至り遠く塞土兩國の國境をも窺ひ匈牙利の南部を横ぎりて塞耳維を過ぎニシユの線に依り前サルタンの滿地にして土耳其新政府の發源所たるサロニカに出で君士坦丁堡に着し水路希臘の主府アデンを訪はんと欲す、アデンを去つて往く所は則ちピラミットの國、斯くて維也納よりアデンに至る幾十日間、忙餘に禿筆を驅つて叙するもの即ち以下の數章なり。

維也納の八日間

維也納は前に二箇年間在住せし所、甲の街乙の衢、猶記憶に存し復た赤毛布を學んで博物館詣りを爲すの勇氣なく、淹留八日の間、出來得る限り多くの官人と會し記者と語り書肆を漁り又新維也納の新機關、新生活を點檢し獲る所尠からざりしが、就中最も余を欣ばしめしは我大使の紹介に依り得たるボスニヤ、ヘルセゴヴヰナ二州の各官憲に對する大藏大臣の命令書、土耳其大使より本國政府への紹介狀の外、福友カフリヒターの與へしカタロ、ザラヱボ、ベルグラット、ソフヰヤ等所在の知己への懇切なる紹介狀なり、公紹介は以て表面を知るに便に、私紹介は以て裏面を洞見するに資すべし。

使館の天長節

明治三十四年の天長節に我使館に集まりし在留同胞は折柄來合せたる朝比奈知泉鈴木宗言兩氏を加へて十數名に過ぎざりしに今年の天長節には來會する者三十名横濱以來紐育迄同行の機を得し日下義雄氏と圖らず此に相會して別後の情を叙するを得たり、而して公使館は大使館となり、爰日の二階借り境遇より一棟の借主と變じ、日露戰爭を經、韓國併合を經て帝國の隆運は正に旭日の如く、此盛時に際し我皇の聖壽を異境に奉祝するは言ふべからざるの快事なり、且當年の公使牧野男は一たび台閣に上り今や最高樞府に願問たり首席書記官吉田君は全權公使として遥遥に在り西書記官は外務本省の樞機に參り肥田書記官は近く行政裁判所評定官に進み、同遊の武人依田、隈、竹内等諸君は或は將官同相當官となり或は將に閣下の階を躡せんとし、千葉、淺山、

能勢、今村、阿久津等諸留學生は博士として大學教授として學界の泰斗となり、石井、田中、石田諸君亦等しく其長ずる所に依りて顯れ、而して同じく當年の駐露公使館首席書記官秋月氏は大使となり十數年來の舊知信夫君は現吉田公使の舊地位を占め他の海陸幕僚乃至留學生悉く一變せるも、老使丁は依然忠實の使丁として勤續せるは頗る床しく感じたり、乃ち天長の佳節を祝すると同時に九年前同遊の人の進境を想ひ新進の俊才集まること三十人に及べるを思ふて快感更に一倍なるものありたり。

維也納と伯林

維也納は舊カイゼル、スタットにして伯林は新カイゼル、スタットたり、余伯林に在る亦一箇年、略其情を盡す、然るに再遊して兩都を較する兩國の國勢の相隔絶せるが如く、伯林發展の速かなる驚くべきものあり、

繞りて周圍を檢し更に南西方を衝いてシャーロッテンブルグよりワンゼー方面に到るものは誰人も其駿々の勢ひに再驚せざる者非ざるべし、伯林は實に大陸に於ける紐育なり、新カイゼル、スタットの此勢に反し舊カイゼル、スタットは舊態依然たりダニューブを渡りて市内に入るに依然たり、市の中樞を往來するに依然たり、然も流石は舊家なり其民温良にして丁寧、伯林人の醱的なるに似ず、身維也納に入りて旅魂更に安きを覺へしむ、一夜大使に伴ふて帝室オペラを見るに劇題は『愛の國に於ける薔薇』と云ひ、演者、劇場共に伯林の比に非ざるを思ふ、余に劇を評するの資格なきも、維也納は依然劇場其者に於て演者の技能に於て世界に於て唯巴里と爭ふべく、伯林は第二位に在るを知る、舊家の屋臺は容易に成り上り者の模する能はざる所か、而も兩都の比較を爲すは記述の範圍外なり、是より直に本題に入らん。

獨皇儲隨員と同車

斯くて去九日夜七時二十分發の急行車に投じ寢臺車に入るに同室の客は獨逸皇太子東遊の一隨員にして土耳其に駐在せしもの、電命に依り一行に錫蘭に追及ばん爲めトリエストより埃及に直行し印度に急馳するものと知らる、客と語りて皇儲の本邦に到着あらせらるゝの明春四月に在るを聞き、過日伯林帝室オペラ劇場に於て皇儲及び同妃の殊更に群衆に伍して「バルクエット」の舞臺近くに席を占め一幕毎に衆と共に拍手せらるる活潑なる御動作を拜したるを想起するを禁ずる能はざりき、而も客云ふ、歐洲の帝王は旦夕を測られず、旦夕を測られざるは獨り嘗昔の葡萄牙王の境遇のみならず、獨逸亦然らざらんやと隨員にして此言あり、頗る異樣の感を爲せり。

維也納よりグラッを經てトリエストに至る三百六十七哩十一時間を

費し翌十日午前六時半トリエストに着し客をハプスブルグ號に見送り、共に朝の珈琲を喫し街頭を散策したる後墺太利ロイド會社のダルマチヤ沿岸航海船プリンツ、ホーヘンローヘ號に投ず。

多島海に浮ぶ

トリエストは誰も知る墺國唯一の商港にして千三百八十二年以來墺國に屬し人口二十二萬(内以太利人七割五分、スラブ一割九分にして獨逸人は僅に五分なり)一昨年の統計に據るに同年同港に入りし船舶の數一萬六百三十三出でしもの一萬六百四十一にして貨物の入りしもの五億四千萬クローネ(一クローネは我約四十錢)出でしもの四億六千萬クローネに及べるも、猶墺國と東洋乃至米國との貿易は多くハンブルヒ其他獨逸諸港を經由するを以て、途に獨逸に由らず直接の貿易關係を助長せんことは墺國上下の熱望せる所にして特に我と直接貿易を試みんことは概に當局者の明言する所なるも、如何せんトリエストの地は歐洲中央市場より僻在せるを、左るにても墺國第一の大會社たる墺太利ロイドが明年より東洋濠洲印度方面に大に航路を擴張し政府之に多大の勢援を與へ居れるもの安んぞ他日雄飛の前提に非らざるなからんや抔考へつゝ舷頭に立つて四望する間に前八時となり船は定期に解纜せり。

以太利語の勢力

トリエストが五百二十餘年來墺領たるに以太利人が全人口の七割五分を占むるは驚くべく、更に船に上りて甲板の掲示廣告の類を檢するに以太利語を第一とし次にセルボ、クロアト語、次に獨語と云ふ順にて之に佛英語を附記せるもあり、せざるもあり、ダルマチヤ州が付て羅馬の治下となり又ベニス共和國の領地たりしとは云へ、スラブ人(セルボ

クロアトはスラブの一族の此方面に國を爲せしこと久しからずとせず、伺牙利亦之を傾せしことあり獨逸人の國たる墺國の取つて領土と爲せしこと亦短からず、而も沿岸に於ける勢力は以太利第一位に居ると云ふべく州の首都ザーラはトリエストと等しく、殆んど以太利人街なりダルマチヤを經、モンテネグロの山國に入るも猶以太利語は土語に次で最も廣く通用せらる、所謂羅馬文明の地理上の繼承者たる以太利人の勢力の此方面に深く侵潤せるは當然のことゝは云へ余をして多少の感を惹かしめたり、之に反し獨語の勢力の微弱なるには亦意外ならざる意外の感を爲したり。

獨逸語の勢力

獨逸民族の國の最大會社たるロイド汽船の掲示廣告に以太利語を最初に記せるに稍首を傾けたる余は暫らくしてカタロに打電せん爲め

船内の郵便取扱室に至り獨語を以て話しかけたるに郵丁之を解せざるものゝ如く、否な少くとも獨語を以て答ふるを好まざるものゝ如くなりしに依り手眞似を以て漸く用務を辨じたるが、彼れ曰く、余は勿論クロアト人なれば獨語を解せず又解するの必要なし、ダルマチヤの公用語はクロアト語なれば從來取扱ひし電報も大抵我母語なりと、而して他の主なる船員は多く獨語を解するも彼等相互の間にはクロアト語を使用し、乘客中にも以太利語を用ゆるもの多きを見受けしも獨語に至りては極めて寥々たるの事實を發見せり、斯くてカタロに上陸し其市役所に市長を訪ひ、質すに何れの語が公用語なるかを以てせしに、軍隊の命令其他軍用語は獨語にして地方廳と中央政府間の往復文書も亦獨語を用ゆるも地方廳例へば當ダルマチヤ諸官衙に於ては相互の往復總てクロアト語なり、裁判所も學校も皆然り尤も市中にては以語とセルボ、クロアト語を混用しつゝありと云へり、國語の勢力の大小

は嘸かて其人種の勢力の大小なり、墺匈國に於ける獨逸人種が萎靡振はざるは余前に之を詳述せり、以て一斑を察すべきも比較的他種族の勢力微小なるべしと想像せしダルマチヤ州に至りてセルボ、クロアト人種が殆乎として土地の主人たるに加へて沿岸に於ては意外にも以太利の勢力優勢に而して久しく國權を掌握し優等人種として他を壓し他に臨み來れる獨逸人の言語の斯くも弱勢ならんとは想ひ設けざる所なりしなり。

ダルマチヤ地方議會

ダルマチヤの人口約六十萬、其大部分はスラブ人種にして北はクロアト族之を占め南はセルビヤ族之に據り、沿岸就中都市に以太利人散布せられ其數約二萬、墺本國人(假りに獨逸人と云ふ)は軍隊士官、官吏等を除けば土着の者殆んど之なきなり、故は州議會に於ける議員の數四十三名の中、クロアト人三十一名、セルビヤ人六名共にスラブ族以太利人六名なるも一人の獨逸種の者を見ず、此機會に於て墺國中央議會に於ける各種族代表議員の數を檢するに合計五百十六名の中

△獨逸人　百七十七名

内　獨逸「クリストリッシエ、ゾシアル」九十六、獨逸國民黨二十五、獨逸進歩黨二十、獨逸農民黨十九、獨逸急進黨十二、全獨逸黨五

△スラブ人　二百二十四名

内　チエック農民黨三十、青年チエック黨二十、チエック黨六、チエック國民黨九、舊チエック急進黨五、チエック進歩黨二、スラボニッシエ保守黨十八、スラボニッシエ自由黨七、青年ルテーチン黨二十一、アルトルテーチン黨五、ルテーチン急進黨三、ポーレン(波蘭人黨)六十九、クロアテン十一、セルベン二

於てスラブに屬するを以て之を合算せり）

△以太利人　十五名

内　保守黨九、進歩黨四、クリストリッシュ、ソシアル二

外に社會黨八十七名、羅馬尼人四名、猶太人二名、無所屬六名あり、社會黨中には獨人もスラブもあるべく而して獨逸種の少數にして遙にスラブの後に在り小黨分立互に相爭へるを知るべく、墺國に於ける獨人や最早永く其優勝の地位を獨占する能はざるの實況に在るを益々立證するに足る、

ポーラとシロッコ

岐路に入りたる話頭を引直し更に前程を急がんに、船トリエストを出で間もなく此内海特有の暴風ボーラ強く吹き荒み白浪幾回か上甲板を洗ひ動搖甚だしく前十一時軍港ポーラに入りて稍安し、ポーラは所

謂「死の風」の意ダルマチヤの高山より吹き下ろす冬季の常風にして十月より四月迄は大抵多少のボーラなきはなく、其激しきに際してはラグサの埠頭百尺の高さに波浪を打上ぐることありと云ふ、ボーラの次に來るはシロッコにしてシロッコは此地方特有の驟雨なり、海上ボーラに遭ひたる余は陸に上りてシロッコに遭ひカタロの一日は大雨の下に過ごし、陸上の大雨は山頂の大雪となり、カタロより四千尺の高峰を越へモンテネグロの嚮山中に於て尺餘の積雪に封鎖せらるゝに終る、ボーラにシロッコに大雪、余は黑山國行に於て最も苦き而も記念すべき經驗を嘗めたるなり。

ポーラ軍港

ポーラは人口三萬六千餘、墺國海軍鎮守府の在る所、千八百十五年以來墺國の有に歸し同五十年以來海軍の本陣となりしもの、埠頭に聳ゆる

アンフキテアトル(圓形劇場)は高さ七十九尺直徑三百四十五尺、二萬の觀客を容るゝに足り千七百六十年前の建築にして其現形を今日に維持せるの點に於て幾多のテアトル中之をチュニスのデル、ジュームの其れに比すべく、船棧橋に着して亘然たる羅馬時代の遺物を目睹し、再び以太利的勢力の侵潤せるを認識せざる能はざりき、當港は紀元前二百年既に羅馬の殖民地となり帝アオガスタス及び其子孫の時代には沿岸に於ける繁榮の市街として顯れ、後千百四十八年ベニス共和國の手に歸しベニス人とセノア人は屢々此港を奪取せん爲め兵戈を交へしが遂に十九世紀に入りて墺國の有に歸するに至りしなり、港内に在る兵艦大小を合せて十數隻新に進水せし裝甲巡洋艦二隻をも見たり、寄港の寸時を利用して街上を歩するに海陸軍人の左往右往し、砲臺に砲艦に兵器廠に全くの武裝市街なり、船ボーラを出で細雨は又ボーラに加はり船中の生活愉快ならず、一以太利人の氣焰を聞きつゝルシンピッコロを經て薄暮ダルマチヤ州廳の所在地たる首府ザーラに寄港す。

以太利人市街

ザーラの人口一萬三千以太利人其大部分を占め市中の色彩も全く以太利式にして千四百零九年より千七百九十七年に至る約四百年間ベニスの有に屬したるの面影を嚴存す、故に此地の選出議員は中央地方共に總て以太利人たり、以太利人が盛に氣焰を吐きしも理ありと云ふ可し、而も今や州の首府として知事あり地方議會あり第十六軍團司令部も此に在りダルマチヤ、ヘルセゴヴヰナ二州軍管區の中心たり、以て政治上、軍事上獨逸人に制せられ居るも亦妙なり。

スパラト

ザーラを出でゝ日全く沒し、復た遠望の快を貪る能はず船室に入りて臥し、セベニコに寄港してスパラトに達せし時は正に夜半、ボーラ猶吹き止まず上りて陸上の景を探るの際もなく考へも起らず史を繙きて興を此地を中心とせる二千年來の成敗に馳す、此地は羅馬帝デキオクレチアンの居を構へし所、其宮址今に存して遊人の回顧に値し、博物館に赴けば更に詳に當年の遺物を目睹すべし、現在人口約二萬、四圍土地肥へて鐵車內地に通じ、又一時羅馬のダルマチヤ首府たりしサロナと相距る僅に五哩、歷世必爭の要害たりしクリサに至る十五哩又サロナよりトラウ間に十三城を數へしも今に存せるは七城のみにしてベニス時代土耳其時代血戰の跡を存し、一たび杖を此方面一帶に曳かんか身は中世紀の昔に歸りたるの心地し行客をして徒徊去る能はざらしむるものあり、スパラト及び其附近には少くも數日を費すの價値ありと聞けり。

ラグサの勝

スパラトにて眠に落ち曉起すれば船はラグサへの出入港たるグラボサ埠頭に在り、昨日來のボーラの爲め延着せること約一時間、夢裡スパラトよりグラボサに至る多島海の絶景を賞し又千八百六十六年以太利の兵艦を擊破して墺太利ヲルソンの稱を得たるチゲツトホーフ提督の古戰場をリツサの沖に眺する能はざりし余は此に至り此方面の景勝に接して所謂ダルマチヤの景勝に飽くことを得たり、而してラグサの一小寰區が久しく獨立の共和國を維持し來りたるの史實を知り得て感更に滋し、風月山水は寧ろ余の甚だしく感を惹く所に非ず、獨立の天地を眇たる方一哩の小區域に保維したる勇敢なる彼等の祖先こそ余が多大の敬意を表する所なれ、此感を以て今のラグサを見る、乃ち山川風物自から勁氣を帶ぶるものあるを覺ゆ、時ふ少しく古に溯らん。

海角の一小共和國

ラグサは一小共和の市街としてベニス全盛時代に於てすらも、半月旗の普く巴幹を風靡せし時代にも居然孤壘に依りて自立し來りたるの珍らしき史跡を有せり、羅馬時代にありては此市は其岩頭に一堡砦を有せし外、微々たる一漁村に過ぎざりしに、一日希臘人の幾人が他の侵略を避け家財と家族とを拉して故郷エピダウラスより來り此堡砦に投じ援を求めたるもの、危機去つて此所に定住し砦外に小市を創設せしに起源し勤勉にして怜悧なる彼等避難者は速かに此市をして此地方の樞區たるに至らしめ而して希臘的自由の精神は凝りて他日其和自立の別宴區を築きしなり、後二百年即第十世紀の初にはラグサの街頭スラブとラテン兩語の混用せらるゝを見、候武の時來り新來の希臘及羅馬兩人種はスラブ族のものと雜婚するに至り茲に此市に熱着する所謂ラグサ人なる者を生じたるが如し、ラグサ人は外交の術に長じ商務の要を解し夙に土耳其と協約して自己を保護し且商利を贏ち得るに其機を誤らず、隣國互に兵を交ゆるや巧に其一に自己の堅壘を貸し、援を求めて壘中に入るの窮鼠は極力之を保護し其敵に一首をだも提供せず、此義俠的行動は敵人の賞讃すら博し得たるなり、斯くて十四世紀頃のサルタン、ムラード二世の如きボスニヤ、ヘルセゴヴヰナ及アルバニヤ三州の逃兵がラグサの壘内に匿るゝを望み見て、一氣に之を屠り盡さず却て賞讃の語を放つてラグサ人の爲すに委したることありと云ふ、彼等は又十五世紀時代既に奴隷貿易を禁止し病院を設立したるの事實あり。

彼等は強國と同盟し其庇護に生くるの外交術を解し二たびビサンチン帝國及ベニス共和國と同盟し十五世紀には匈牙利に依り、後匈牙利より巴幹一帶土耳其軍に壓倒せられし時にもサルタンに定額の朝貢

を爲して能く獨立を保ち、オスマン時代にはラグサ商船の土耳其諸港に出入するもの頻繁なりしと云ふ、彼等は斯く外交に長ぜしも又一方に於て勇敢の性を顯し北同盟が苟くも併呑の牙を磨かんとすと見るや、直に他に援を求めて自らも亦極力自個の防禦に闘市の力を致せり斯くて千八百五年に至る迄獨立の共和國たりしも同八年ナポレオン大帝の爲めイルリヤ新王國に合せられ同十四年墺國の有に歸し以て今日に及べり、余はナポレオンが何故に此珍らしき市民の名譽ある歴史を尊重して彼等の欲するが儘に其獨立を保存せしめざりしかを訝かるものなり、大志ある者は須らく寛仁大度なるべし、渺たる蕞大の地世界を統一せんと欲せし彼れに取つて其れ幾何の加ふる所ぞ、而かも彼等憐むべき市民は降らんよりも寧ろ死を選びしなり、客若し岸に上りてラグサよりラバート半島の山角を遡遡せんかラグサ市民の最後の血を濺ぎしの跡を弔ふを得ん、ナポレオンが末路の悲慘ならざるを得ざりしは此一小獨立國に對する措置に見ても一端を窺ふ可し。

彼等は此の如き名譽の歴史を有せり、而して海上より見ゆる城砦に、レクトルの宮殿に、寺院の警鐘に、到る處回顧の種ならざるはなし、ラグサの天然の景勝は此光輝ある史跡に依り一層の光を放つ、今や人口八千四百、市民は今猶埃太利人と稱せらるゝよりもラグサ人を以て居るを誇りとせり、ラグサの現在はモンテネグロの歸途に更に記述することゝし進んで天下の絶勝たるボツカ、カタロ(カタロの内海の意)に就き筆を下さんと欲す。

古來血戰の巷

船グラボサを抜錨しラグサを左にし東南に直下して岬角の盡くる所は即ちボツカの入口たるドストロ岬なり、岬を回り右に砲臺を眺め、水面滑かにして汕の如き内海に入り、仰ぎ見ればダルマチヤ、モンテネグ

ロの山勢茲に窮まる所、最高六千尺の雪峯嶄然として眼前に聳へ内海曲折して三大底を作しカステルヌボに至り古土耳其時代の堡壘を望み、更に北してスパニョーロ城あり、此城は土耳其とベニス兩國が多年爭奪せしの所、其名よりせば西班牙人の築きしものなるべけんも城門には千五百四十八年土耳其人の記せし文字を存せり、是に於て余をして少しく此内海の舊史を語るを許せ。

ボッカ、カタロを繞りて水邊山角に居を構へる土民の數約三萬七千以て一郡を爲しカタロは其中心たり、連山到る處に堡壘あり、約一箇師團の兵此中に屯し師團長はカタロの司令部に在りカタロも一の軍港にして軍港司令官は一少佐之に當り、リザオ、ベラスト等總て大兵を屯せざるなく内海の全部が居然たる一大城廓をなせり、ボッカが天嶮の要害たる今も此の如く昔も猶此の如かりしなり。

ボッカ、カタロの昔に顧みんか、イルリヤの女王チユータがシーザルの使節を屠りたる爲め羅馬の復讐を避け首府スクタリより此海岸に遁れし時代に溯るの興味あるを覺ゆ、後六十年即ち紀元前百六十八年イルリヤ最後の王羅馬に捕囚となり、ボッカは自然其有に歸し、羅馬の別れて二邦となるや南部ダルマチヤは君士坦丁堡に屬し、六世紀にゴッスに略取せられしも續いてジャスチニアン帝之を恢復し十世紀に入りデオクレヤ王國の一部となり、十四世紀末にはカタロの共和國を形成して匈牙利王の保護を請ひしもベニス人の略取する所となれり、匈王は後間もなく之を恢復せしも久しからずしてボスニヤ王に讓り次て土耳其の有と爲ること二百餘年、千六百八十七年ベニスの手に歸す、ベニスの治下に在りし時代は則ちボッカの住民の最も繁榮せし時代にしてカタロ背後の山上を繞る城壁の如きベニス時代の物なり、ベニス倒れて千七百九十七年墺國初めて之を占領したるもナポレオンの崛起するや其奪取する所となり千八百十三年更に英將の手に移り越

へて翌年モンテネグロ公に附與し、公の手に在る僅に六箇月再び埃人の有に歸して以て今日に至れるも、土民は久しくベニス共和國下に自由を享有したるの當年を回想して其の軍政を喜ばず、其餘怒は激して千八百六十九年の反亂となり、容易に平定の効を奏する能はず、叛徒の遁れて黑山國の山中に入る者多かりしと云ふ。

カタロに上陸

カステロヌボを過ぎチオド灣を越へ最狹の峽水を渡りて最内部のカタロ灣に入り、兩岸畫くが如き人家と山色とに昨日來の疲を慰し正午カタロの埠頭に船は横附となれり、水上よりカタロの第一瞥は頗る旅人の感興を惹くべく市の背後に聳立せる三千餘尺の高峰は全山暗黑の巨岩を以て成り、左にベニス時代の城壁を眺め右に一條の道路の蜿蜒空に向つて消へ去るの所、其景最も雄渾なり、此山は黑山國と其境を

劃する所にして山上山腹には數箇の砲臺あり、哨營散在して不斷の警備を爲せり、此道は三十餘年前埃國政府が山國の同意を經て築きし所カタロより首都セッチンニに至る二十八哩、水面より起りて直に三千餘尺の高峯を越へて山國に入り一たび下りて更に四千餘尺の高きに上り、海拔二千一百尺のセッチンニに達するもの、是れ唯一の車道にして旅人は之に依りて數百年來秘密に閉されたる全國皆兵の一獨立國に入るを得るなり。

ホフリヒターの友人アダミカなる者歩兵の士官としてリヅの戍卒に長たり、前にポーラより打電し置きたるに彼在らず依つて上陸直に城門を入りて小ホテルに投じ、走りて郵便局に至り郵便自動車の發車如何を尋ぬるに僅に六人を容るゝに足るの自動車のことゝて最早便乘するの榮を荷ふ能はず、依つて一方に打電してアダミカを召し、又明日發の自動車に便乘せん爲め豫め切符を求めて必行を期し、斯くて此城

中に一泊することゝせり、トリエストより此に至る水路約四百九十海里、二十八時間にして達せり、沿岸航海の船としては速かならずとせず、而も一日航程の此間に於ける船賃六十クローヂ(約二十四圓)にして食事は毎回別に支拂を要し、室内設備の不完全なるに加へキャビンの代を普通の船賃中に含めざる如き頗る珍と云ふべく、之を船員に問ひしに急行船なる爲め高價なりと答へて他を云はず、之に比してカタロ、セッチンニ間二十八哩の山道を驅る自動車の十クローヂなるは意外に安値と云ふべし。

山下の兵村

カタロ城内の人口約三千、城外及び附近を加へて五千七百を保つのみなるも師團長以下將官の在任する者三名、郡長もあり裁判所長もあり羅馬加特力と希臘オーソドックスの僧正各此所に居る、市は山角に據り繞らすに城壁を以てし堡壘、砲臺前後左右の逃山に築かれ街頭兵士を以て滿ち宛乎たる山下の一兵村なり。

海濱に出でゝ黑山(モンテネグロ)國人の集まれる市場を見る、嘗に聞きしと事違ひ腰間何等の武器を携へず游りて之を傍人に質すに五十年前山國の國公ダニロ(現王の先代にして伯父)が此地に於て自國人に刺されて竟に斃去せられし事ありし以來、黑山國人の墺領に入る者は悉く其武器を墺外に留置せしむることゝなり以て今日に及べるなりと、初めて其理由を解し得たると共に黑山國の如き愛鄉心に強く從つて其國父に忠實なる山人の中にさへ斯かる徒の出でしかを思ふて多少の感なくんばあらず、微々たる兵村何等觸目に値するものなく退屈凌ぎに郡役所に郡長を訪ひ軍港司令部に司令官と語り夜に入りてホテルの穴倉に入りて晩食せんとせしに傍に坐せし一士官來り揖して曰く『余はアダミカの友人にして先刻アダミカより電報を入手したり彼は船便なき爲

め貴下を此地に來り見る能はず明朝の便を以て來市すべきに依り此夕は代つて貴下を接待し呉れよとのことにて、貴下の歸館を待ちつゝありたり」と、斯くて士官と語る中に數名の同僚來り加はり、食を終へて市中唯一の珈琲店を訪ふて共に談笑し大に旅懐を慰し且國風を察するを得たり、此士官は此邊境に駐する既に十五年少尉として來り猶大尉の列に在り維也納を見ざること十四年に及ぶと云へり、又傍の一下士と談ずるに彼れ此地に在る既に十一年、兵卒より上りて猶下士たり月俸百五十クローネ(約六十圓)を受くるも物價は之を十年前に比し或物は三倍し或物は五倍し六倍して生活難切りに加はるも俸給令は十一年前に一回改正せられ昨年改正せられしも增加率は僅に一割五分乃至二割に過ぎず生活の至難なる以て察すべしと、憐むべき下級の成卒に至りては一日十四ヘルラー(五錢六厘)を給せらるゝのみ、斯くて上は將官より下兵卒に至る迄、花の都を呎尺の間に想望しつゝ日々邊戍の苦を嘗めつゝあるもの、我に詩才あらしめば好個の詩題なるに抔思ひつゝ列座の客に辭し士官と別る。

翌朝アダミカ遙かにリザノより來訪す、依つて共に相携へて師團司令部を訪ひ、來る十六、十七の兩日を以てリザノ方面より深く高く黑山國の境界線に馬を進め防備の狀況、砲臺の內部乃至戍營の眞景等を視察するの特別允許を得再會を期して別る、余は斯くて彼の東道に依り明後日を以て普く邊境の狀況を窺ふの機を得たり、是れ墺國官憲の我に懇切なるの致す所ならんも亦舊友ホフリヒターの賜と云はざる可からず、彼と別れて朝來の豪雨を侵しセッチンエ行の郵便自動車中の客となりしは一昨十二日の後一時半なりき、黑山國の紀行は是より起る。

黑山王國

十一月十五日夜黑山國の山下墺領カタロ兵村に於て

入國途上＝四千三百尺の峠＝自動車の後推し＝亦盜心あるか＝首都の大觀＝國王に謁見＝幸福なる國王＝モンテネグロの過去＝現在の概況＝全國皆兵の國＝國民の風俗＝劇を觀る＝各國の使館＝カタロに歸る

入國途上

カタロより黑山王國（モンテネグロ）のセッチンニに達するの法三あり、健脚者は巡山疊の間を越へ歩して山國の首都に達するを得べく、或は二頭若くは四頭立の馬車に倚り新道を羊腸して之に赴くべし前者は少くとも十二時間を費すべく後者も六七時間を要す若し夫れ毎日一回發車する郵便自動車の便を藉らんか、快晴の好天氣ならば能く三時間にして二

十八哩を疾驅するに足り馬車の三四十クローヂを要するに僅に十クローヂの運費にて事足る、余は乃ち自動車の最速最安の方法を選びしなり。

後一時半朝來の驟雨催に止みて車は定期に埠頭を發す、同乘の客四人、黑山國の大男年齢五十餘歳體量二十七八貫なるが一人、黑山國の少女二八貌醜からざるが一人、クロアトの灰殼二十數歳なるが一人と余なり、灰殼は前椅に凭り余と山人二名後椅に踞し行李所狹き迄車中に積まれて身動きもならず、カタロを出で楢樹の疎林を過ぎ直に山道に取掛り七百六十尺の高臺に在るトリニタ砲臺に小憩し羊腸の街道を上り千六百尺のペルマク砲臺を右にして左に廻りゴラッダ砲臺を横ぎり約二千尺の高處に達し俯瞰するにカタロの小市は縮んで拳の如くボッカ、カタロ一帶眼底に收まり遙にアドリヤチック海の波濤平疊の如きを望む、墺國の哨營を過ぐる所より途上雪滿ち折柄の强風寒を降

らし、花恥しとも云ふべき少女は大男と相合して心地よげに戯歌を連吟し山道の嶮も雪餐風饗も何等意に介せざるが如く流石は現代スパルタの兒女なるを思はしむ、而も破れたる玻璃窓より吹き入るボーラの強き風と風に混して面を撲つの霰とは高きに上るに從ふて加はる寒氣と共に聊か一行を閉口せしめたり、況んや頂上に達するに從ひ黑雲脚下に捲きて咫尺を辨せざるをや、正しく雷に乘じて空を馳るが如く、カタロより上ること約八哩、三千尺の高處に達して茲に黑山國の領域に入りぬ、領域に入りて風漸く弱く而して雪の積れること既に尺餘、遙に六千二百尺の峻嶺ゴラピアンカを北に眺め穴居に等しき原始的石屋と牧羊の民を稀に岐路に認めつゝロブチェン山の方向に向つて進み更に三哩にしてニェグス村に達し小憩す。

四千三百尺の峠

ニェグスは中間の一驛、現王誕生の地、其家屋は村の一端に在り我田舍の庄屋にも劣れる小屋にして、斯る寒村に成長せられたる王並に王族が一體に軀幹強大容貌秀麗なるは實に天然の賜と云ふ可く特に人を して敬意を表せしむ、驛には關吏あり旅客の行李を檢し各國境驛にて爲すが如く通關の檢印を捺す、一小ホテル名はグランド、ホテルと云ふも冷肉の外口に上す可きものなし。

ニェグスを過ぎて車は再び上り坂に向ひ幾回か停車せんとして必死の力に漸く進行を繼續し來れる自動車は此に至り積雪の爲に寸歩も前に衝く能はず、已むなく乘客四名等しく降りて御者を拔け後より之を推し上げ僅に數町を往きて復た停車し斯くすること三回、日暮るゝ頃漸く四千三百尺のクリワチコ、ヴルエロ越頂上に達し一茅屋に憩ふて寒を凌ぐ、半輪の明月既に冲天に在り、月光に依り四望するに見渡す限り山岳重疊し山上の白雪は天上の星雲と相映じボーラ切りに面を

吹きて咫尺幾人の生物の外何物の存在をも許さゞらんとする悽愴深
酷の光景覺へず人をして悚然たらしむるものあり。

自動車の後推し

明治二十八年冬領臺の當初臺灣に遊びし時劉銘傳の建設せしてふ汽車にて基隆より臺北に向ふ途中上り坂に達して汽車進まず一同歩して後推しをなしたることあり汽車の後推も恐らく世上稀に見る出來事なるべきも一時間五十哩以上を疾驅するに足る自動車の後推しを爲すも亦屢々遭ふの出來事に非ざるべし山上の茅屋二三種の土酒あり各數杯を傾けて寒を凌ぐ原始的の石屋猶床上に數箇の短銃と刀劍あり以て此國の國風を察すべし憩ふこと約一時間再び車を進めんと欲するに寒風の峻烈なる機械凍着し容易に運轉すべからず且油を注ぎ且後推を爲し約二時間を費して再び運轉を開始するを得是れより下り坂となり驅る少刻にして遂に下底晴を破りて燈火數十の點々たるを見る大男小女狂喜して余に指して曰く『セッチンエーセッチンエー』と彼等は國都の面影を燈火に依りて眺め得元氣百倍せるが如く大聲に國歌を連吟するも可笑しく余も亦甚だ喜色あり斯くて海拔二千百尺の山底に達し以太利の新公使館を右に墺國公使館を左に望みつゝセッチンエの大街に入りグランド、ホテルに投ずれば時正に夜八時四時半に達すべき筈の定期郵便車が三時間半の延着を爲せし勘定なり。

亦盗心あるか

ホテルに入り暫くにして毛布を車中に忘却したるに氣附き使丁を急派して之を求めしめしに何れにか失せて在らず自ら出でゝ御者に談判するに大男が持去りしと云ふ依つて主人に實を告げたるに間もな

くして之を持來りたり、山中の人亦盜心あるか、非乎、余は黑山國の民の勇武にして士節を砥礪し古スパルタの遺風あるを傳聞し居たるに、親しく此地に臨むに世界何れの國にも共通なる國費の多端と生活難は此山中の桃源洞をも襲ひ物價高騰して民に生色なく課稅の重きに苦しむの餘り漸次に惡風に浸染しつゝあるを見る、特に近來米國に出稼するの壯丁は其數五千を算し此等の徒が彼地にて贅澤の生活を經驗し多少の利を穫て歸り以て鄕黨に誇るもの多きより曩昔の美風は漸く此等の惡空氣に化せられ、敎育普及せざるの缺點之に加はりて靑年子弟の良心を魔痺し彼等の錢を愛する乞丐の如く頗る人をして惡感を催さしむ。

首都の大觀

首都セッチンニは前に述ぶるが如く海拔二千一百尺の高臺に在り、三千尺より六千尺に至るの高峯四圍を繞り平地方一哩、高きより俯瞰すれば池底に在るが如く、人口約三千、二條の大道西北より南東に通じ塊露の二公使館は市中第一の大建築として宮殿よりも大なり、東西兩端に對峙し黑山國の首都を監する番犬の如く、以太利公使館新に成りて塊に隣りし國母陛下の故鄕を飾るに反し、以國皇后が現王の女たるは人の知る所、土耳其の使館は露に隣りして狹隘なる一平屋に過ぎず、以て曩昔の宗主國の威嚴を損する甚だし、ホテルの側面には獨の使館あり其東にあるは則ち王太子の新宮、西にあるは則ち王の宮殿なり、宮殿に近く新に各省を一字の內に收め得る建築あり、議事堂亦之に隣りして漸く成る、市の中央に市場あり、市場の東北に兵營あり、兵營の右に劇場あり、圖書館及新聞縱覽室を附屬す、此劇場は從來國會議事堂に兼用せられたるもの、劇場の開くる一週二回、議會開會中と雖も盡は國事を議し夜は觀劇す、頗る便ならずや、新內閣の建物に近く高等中學あり、是

より一條の細道は千四百八十年に創設せられたる歴史的寺院に導く、是れ前の國公の居所にして現に僧正之に住み全國の末寺を管領す、公家の廟墓を越へて更に山を登れば土耳其人の築きし圓形塔あり、黒山國の民が土耳其と戰ふて其首級を獲るや之を塔上に吊すに用ひられしも亦妙なり、此他女學校に病院等數へ來れば此の如きもの是れ首都の大觀なり、雨のカタロを出て國境に入れば積雪尺餘、雪中の首都何等見るべきものなく自動車復た通せずと云ふに、維也納以來の疲れを慰するに屈竟の機會なりとし此山中の小村、小市と云ふよりも小村と云ふを適當とす)に二日三夜を過ごし、各公使を訪ひ劇を見、大臣と會し、侍從長と語り、士官と語り、土人料理を試み、土民生活を檢し最後に國王に謁して敬意を表し、記念すべき經驗と智識とを得たり。

國王に謁見

一昨日墺國公使ギーセル大將と會見の序に國王に謁するを得べきや否やを問ひしに王は最も平民的にして喜んで外客を引見す、王年既に七十なるも强健壯者を凌ぎ幾多の戰場を往來して勇武を顯し、又切りに文明の治を輸入して一代の名君たり、此地に至りて王に敬意を表する最も可なりとて侍從長ラマドノウッチに紹介せらる、依つて辭して侍從長を訪ふ亦能く余に接し且自國の狀況を說く詳かなり、其夜宮廷より一書到來披き見るに「侍從長は陛下が十一月十四日午前十時王宮に於て引見するを喜ばせらるゝをモッシュー、〇〇に報知するの名譽を有す」とあり、宗教は希臘オーソドックスを奉し人種もセルビヤ人の後裔にして則ちメラブたるは人の知る所、人種宗教の關係より隱然露國を宗主と仰ぎ特に前公ダニロガ國公にして教主たりし歴代の地位より離れ別に管長を設け自らは唯政治上の主權者として立つに至りしより自然露帝を教主と仰ぐに至り、從つて萬事が露國式にして曆

年も國内一般に露暦を用ふるに拘らず十一月十四日(此國の暦にて十一月一日なること露暦と同じ)と書し且佛文を以てせる所、流石は小なりと雖も一國の宮廷なりと直覺したり、斯くて幸ひタキシードに高帽を持合せたるを以て昨朝指示せられたる時刻に宮殿に赴くに殿前の街頭雪中に一小隊許りの衛兵の整列せるあり、殿に入れば階上階下の段側に八名の盛裝せる兵士直立す、侍從長と侍從武官に導かれて先づ階上の大廣間を過ぎて左側の休憩室に憩ふと間もなく侍從長に導かるゝが儘、更に大廣間を越へて右方の一室に入らんとすれば軀幹肥大の國王は莞爾として余を迎へられ室の一隅に坐を占めらる、余は直立して恭答しつゝあるに切りに着坐を命ぜらるゝが儘卓を隔てゝ椅に凭る、王は先づ余の旅程を問ひ東京にも斯く雪は降り積るや今は此國に來るのは不愉快の時節なり抔の御言葉ありて後、朕はペテルブルグ又は伯林の宮廷にて有栖川宮殿下を識れり、今の海軍大將の宮のみな

らず父の宮をも知れり、極めて怜悧に且勇武に見受けたり、其他貴皇族の風采に接せしこと尠からず、我娘の以太利皇后よりも屢々貴皇族に就ての話を聞けり等の語あり、王は佛、以、露三國語に長ぜらるゝも獨英語には餘り通じ給はずと聞く、而も唯だ兩個對坐して對話せしに終始獨語(余が前に侍從長と獨語にて物語れるを聞き給ひしならん)をもて余よりも勿論流暢に物語りありたり、余の不規則なる獨語こそ恥かしく失禮の極みなりしならん、約十分の後、再び侍從武官に導かれ階下の一室に小憩して引下れり、新刊の一英書を繙くに左の句あり(著者は日露戰爭時代に此國を旅行せし者ならん)

余の會話せしモンテネグロ人は多く日本の成功を聞くを喜ばずして云ふ、請ふ陸戰あるの日を待て而してジャパンは或物を見るならんと、之に關し一場の物語りあり、國公(當時は猶國公なり)或る日英露公使其他の客と宮中にて會宴中に丁度日本が陸上の第一戰に勝利

を得たりとの電報に接せられ、一見の後之を坐上の客に回覽せしめられ、露公使の手に達するや、公は其れを暫見し『オー、ルウター電報、ペテルブルグにては同一の筋より流出する異りたる新聞を得ん』と低語せらる、ルウターは勿論英人のテレグラフ、エゼンシーなるを以て我公使(著者は英人なるを以て然か云ふの面前にて斯る語を放たるゝは優雅と云ふを得べからざるも、同夜更に第二の電報あり、此電報は曾にルウター來電を確むるものたるのみならず戰の結果露國に不利なりしことを叙するに於てルウターに優るものありしに依りて我公使の不滿足は稍償はれたり。

果して斯る會話ありしや否やを知らざるも其初めに於て小日本の大露西亞に勝つべしと想ひしもの恐らく百中の一二に過ぎざりしなるべければ斯る會話ありしとて何かあらん。

幸福なる國王

國王ニコラス一世ペトロヴヰチ、チゴシュ(土民稱して「ニキタ」と呼ぶ)は千八百四十一年の御誕生なれば正に齢七十、去る八月即位五十年の祝典に際し公殿下より王陛下となり黑山公國は躍進して黑山王國となり歐洲大國の宮廷と對等の班に晉ませらる、寔に此國の爲め慶賀すべきなり、王容貌魁梧傳來の國裝に幾多の勳章を帶びさせられ、七十の老體髮髮霜を點するも赭顏豐頰、五十年來戰場を往來して鍛錬せられたる御軀は猶鐵の如く强健なるものあるを拜したり、王は寔に黑山國男子の好標本なり、王后ミレナ陛下も六十餘、猶御壯健にして御二方の仲に設けられたる王子王女は其數十一、男三女八、長男即ち王太子ダニロは獨逸メクレンブルヒ太公の女を娶られ二男ミルコはセルビヤ某大將の女を容れ妃とせられ、三男ピーターは猶未婚なりと聞く、其に御

壯健にして太子には既に王孫あり、長女ミリザは露國ピーター、ニコライウ希ッチ太公に次女アナタシヤは同じく露國ニコライ、ニコライウキッチ太公に嫁せられ、三女ヘレナは則ち以太利現皇后となられ、四女アンナは獨逸バッテンブルヒ公妃となり、幼にして父母の宮廷に在らせらるゝの王女二人、此外に一女は早く沒し他の一女はセルビヤ王后となられしも亦前年崩去せらる、斯く二女の他界せられたるを除き總勢九人は壯健にして王子は大國の王女を迎へられ王女は大國の后妃となられ、家門の繁榮は歐洲宮廷稀に見る所、王骨て侍臣に映の財產は子女なりと曰はれたりと聞く、今回三千五百平方哩、二十七萬の人口を有する渺たる小國を以てして公國より王國となり列國擧つて直に之を承認せしもの、名譽の歷史を有し積勢の致す所と云ふと雖もマゴシュ王家の家門繁榮し枝葉廣く大國の彼方此方を賂せるもの之を助成せし一因ならざらんや、余は試みに露公使アルセニエフに會して其意見を問ふ、公使曰くマゴシュ家は素性宜しく第一に身體壯健容貌美麗の血統なり、大國の王公と婚嫁せらるゝ所以なりとげに然あらん、若し未婚の二王女にして更に大國の后妃たらるゝの日には現王の得意想ふべし、王の晩年は斯く子寶あり公國より王國となりて順境に在らせらるゝが如きも治世五十年間の奮鬪史を回顧せば自から常然の應酬なるやに考へらる、請ふ之を機として當國の小史を叙せん。

モンテネグロの過去

此國の歷史は土耳其と不斷の惡戰苦鬪史なり、十四世紀末土耳其が巴幹一帶を征服するや、カタロよりスクタリに至る今の此國の地域はツエタ公國としてセルビヤ族の出なるバルシチ家の支配に屬せしも千四百二十一年バルシチ三世死し其後繼として勇敢なるスクアアン、グルノゴライ出でタルノエウキッチ國と稱し千四百八十五年セッチン

エ寺院(前に述べたり)を建て首都の基礎と爲しベニスと同盟し屢々土軍を敗り其子イワンの名は今も猶國中の英雄として俚耳に存す、後千五百十五年に及び僧正ウアビル主權を握り爾來君主は教主を兼ねて現王家の祖先ダニロ、ペトロウキッチの世となり、勇剛なる彼は國内の非基督教徒を屠殺し彼得大帝と結びベニスと同盟して土耳其と戰ひ大に國聲を四隣に馳せ、後其子孫屢々土軍と戰ふて其民愈々訓練せられ、ピートル一世の如き千八百六年露軍と共にナポレオンの兵をラグサに圍み、次に千八百十三四年にはボッカ、カタロ一帶を略取せしも再び墺國の手に返還したることあり、其子ピーター二世は同三十年より五十一年に至る迄此國に君臨せしが彼は彼自身有名の文學者にして又法律を制定し元老院を設け諸官衙を整へ新税を課し印刷局、學校を建て大に文明の空氣を輸入せんことを企てたり、其後繼ダニロ一世一八五一年――一八六〇年)に至り教主の地位を去り政治上の主權者として此國に君臨することを宣言し國國の民之を賀し墺露兩國之を認め國勢の發展に盡くす所尠からざりしが千八百六十年八月カタロに於て國人の兇手に斃れ其甥たる現王ニコラス一世、二十の弱年を以て公位に上るに至りしなり。

是より先き王トリエストに遊び、凶報を耳にしたる際には佛京巴里に在りしが電馳して母國に歸り、位に即くや直に兵戈を執つて強敵土耳其に當らざるを得ざるの難局に坐せるを見る、而も彼は能く戰ひ能く和し、最後に千八百七十八年の伯林條約に依り公然獨立を承認せられたるのみならず、現に此國の富源たる東南方ニクチシユ、ボトゴリッアよりアンチバリーエ灣の地約五千百平方吉米突を得其領土を二倍以上に擴大し、盤々八十年更にアルバニヤ海岸なるダルシグノ地方を得て、海口をアドリヤチック海に有するに至り、爾來三十年間極めて平民的に其民と接し好んで外客と語り列國との交際も從つて圓滑に、前の

元老院を國政委員會とし責任内閣を廢設し、越へて千八百八十八年には新法典を編纂公布し、去る千九百五年十二月新に國會(スクプチカと呼ぶ)を開き歳計其他重要の政務を衆議に諮ふに至りて土耳其の魁を爲せるも面白し。

現在の概況

黑山國は其名の示す如く全國殆んど暗黑色の岩層より成れる迦山にしてカタロよりセッチンエに至る二十八哩の好景の如き眞に生物の存在を許さゞるが如き憐むべき瘦土にして其民は牧畜を唯一の家業とせるが如きも、國の東南部ボトゴリツアを中心として土領スクタリに及ぶ一帶及びアドリヤチック沿岸は稍々平地に富み農耕に適し煙草、虫藥、家畜、葡萄其他一年の輸出約二百萬クローネに上り、輸入は墺國大部分を占め土、以、英之に次ぎ合せて六百萬に上るは是非もなし。

現に國内電信線路は九百吉米突に及び自動車の定期往復を爲し得るもの約百五十吉米突、開してスクタリ湖畔のウヤルベルよりアドリヤチック海岸のアンチバリ港に至る四十二吉米突の輕便鐵道は同港の修築權及スクタリ湖の航海權を併せ得たる以太利人會社資本一千萬クローネの手に依り一昨年來開通し、同會社は更にスクタリ湖東畔なるプラミッツより國中第一の商都たるボトゴリツアを經て東北ニクシュに至る七十二吉米突間にも新鐵道を敷設するの計畫中なり、此鐵道成りアンチバリ港の修築亦成らば此國の產業も新紀元を劃するに至るべく、從つて以太利人の勢力は國人が墺匈國を敵視するに反比例し宮廷の烟戚關係之を助長して今後大に發展すべきの運命に在りと云ふべし。

歳計を見るに千九百七年に歳入約三百萬クローネ、地租、關稅、鹽及煙草の專賣、郵便電信收入等にして歳出も三百萬、公債償却金の七十三萬を

筆頭とし內務五十八萬、大藏四十九萬、文部二十萬、陸軍二十萬之に次ぎ王室費十九萬、恩給費十八萬、外務十五萬、司法十五萬等なり、本年の豫算は約三百四十二萬に上る。

議員の數七十二人、中十四人は憲法に依り議員たるの權を有する者にして將軍三、オーソドックス僧正、カトリック僧正、回教僧正各一、收入長官一、高等裁判所長官一、國政委員會議長一、國政委員會委員五是なり、殘餘五十六人は則ち選擧に係り二十一歲以上の男子にして年額二十クローネ以上を納稅する者は被選擧權あり、議會は本月末に開くと聞けり、黑山國民の議會頗る珍ならん。

國內に中學校二、小學校百三十二、女學校一、病院もあり新聞もあり印刷局もあり、國立銀行も五年前初めて五十萬クローネの資本を以て設けられ、從來の通貨は墺匈國貨幣のみなりしもの一昨年新に六百萬クローネの外債を起し自國の貨幣を鑄造し金貨、銀貨、ニッケル貨、銅貨あり

價格は墺匈國と同一の標準とせり、斯くて兎に角一國の體を爲すに至る、王や五十年來の治政を回顧し胸中多少の慰藉あらんか、而して是れ半世紀に亘る王の苦心の賜なりとせばニコラス一世は蓋し此國中興の主と謂ふ可し。

全國皆兵の國

次に此國に珍らしきは前陳の內勢に非ずして其民のスパルタ的たるに在り、全國皆兵の國たるに在り、國內の人口二十七萬、內一萬五千は米國に出稼をなせり而して十五歲より六十二歲に至る男は悉く兵役の義務を有し出稼人と雖も亦然り、斯くて訓練を經たる者三萬六千人職時には五萬二千の兵を出動せしむべく、ボスニヤ、ヘルセゴヴィナ合併の警耗に則擧せられ新に徵兵令を發布し每年兩回二十一歲より二十五歲に至る青年を六百名宛四箇月間首都の兵營に入營せしめて訓練

を爲し斯くて一年千二百の訓練兵を得ることゝせり、男子十五歳に至れば政府は之に武器を支給し、兵役の義務ある男子が其居住地を距る二時間程以外の地に赴く者は必ず武器を携帶し武裝するを要し、一旦出先に於て召集の令に接せば直に其最寄の兵區司令部に馳け附くるを要すと云ふ、而して非常の場合には婦女の徒は輜重兵となつて男子軍に後援すること固よりなり、こは侍從長の余に語りて大に誇色ありし所、即ち五人に一人は兵士なる割合なり、此國が從來土耳其の勢力に屈せず存立を保ち來りしは全く此皆兵主義の賜にして其民自然に勇武の俗を成せしものならんも、果して現在に於ても然かく勇敢なりやは疑問なり、昨日大藏大臣ゼルゴウッチと語る、彼れ合併當時に於ける此國興奮の狀況を述べて曰く、黑山國人は勿論死を以て墺匈國のボスニヤ合併に抗せんとし全國の兵士を國境に集め、米國に出稼の壯丁も爭ふて歸り來りたり、六千尺の高峯ロブチエンの頂に砲門を据へ直下にカタロの根據地を粉碎せん覺悟なりしと、是れ恐らく彼の傲語のみ、昔時に在りては山中の一騎打戰としては險害に依り自ら守るに足りしならんも、今や其民の教育猶遙に幼稚にして訓練兵も亦農民兵の稍優れるものに過ぎず、假令宗國の武器を無限に給するあるも之を使用するに多大の困難あり、黑山國の皆兵主義は國情然らざるを得ざるべきも、墺匈國に戰を挑むが如きは蟷螂の龍車に向ふに異ならざるのみ、而も前にも述べたる如くボッカ、カタロには約二萬以上の墺匈國兵士屯して之に備ふる所、黑山國人の意氣に警むる所あるものか。

國民の風俗

黑山國人はセルビヤ族に出で言語文字もセルビヤと略同じく風俗亦相似たるも以太利及土耳其の習俗之に附加せられて一種の國風を爲し服裝の中世的なる赤青線等の色彩に富み、國王並に官吏の正裝に至

りては更に飾るに金銀を以てし人目を眩するものあり、彼等の容貌骨格は山中の民に似ず頗る立派なるも女子は多く出でゝ力耕し勞役するが爲め早老して青春の美を保つもの稀なるは人生の慘事なり、一昨夜ホテル主人の一女匈牙利の醫師某と婚し其式を擧げ全都の主なる男女悉く來會す、余之に列するを得て普ねく物色したるも女子は遂に男子の風姿堂々たるに如かざるを發見せり。

劇を觀る

一昨夕芝居ありと云ふに風俗の一端を察するの便にもとて之に赴く、即ち議事堂と相兼ねるものにして客三百内外を容るゝに足る小規模のものゝみ、音樂は軍樂隊之を奏し樂長が軍服帶劍の儘に樂手が外套を被れる儘に奏樂せるも面白く觀客亦外套の儘着席せり、嚴寒に吸煙の設備なき爲めか、藝題は『愛の叔父』と云ひ獨劇の飜譯なれば以て國俗を察するに足らざりしかば直に辭し去れり、之に就て想ひ起すは現王家の文學思想に富み給へることなり、ピーター二世が有名の詩家たりしは前に之を叙せり、現王も亦此國の作家にして其著はす所『巴幹の女皇』は獨露等各國語に譯せられ人の廣く知る所、他にも二三の作あり、侍從に聞くに今も猶閑時に執筆せらるゝを常とすと云ふ、勇武の君にして斯く文字の才あり以て光輝を加ふる萬丈と云ふべし。

各國の使館

此國と直接の關係多きは墺、露、土の三國にして以太利之に次ぐ二年前より墺、露、獨、佛、土、以、米、セルビヤ、ブルガリヤの九國は從來の辨理公使の列を上せて全權公使を派駐せしむることゝなり英は代理公使、希臘は外交代表者を置き各國使館のセッチンニ首都に在るもの十一、一小村に盤居せる外交團の無聊想ふ可し、露公使は年齒六十餘、二十二年前獨

逸に駐在し大使館書記官たり青木子爵を識れりと云へり、公使が切りに余に向ひ日本は土耳其と條約を結ぶの意あり、談判進行の模樣如何抔問へるも可笑、余は天涯浪遊の處士何ぞ外交の機微を與り知らん、而も公使の之を窮追するは職掌柄と見ゆ、墺も大將男爵の肩書を有する老外交官を駐在せしめ居れり、土耳其との事故最も多く爭鬪の終年終月跡を絶たざるは國境の明かに限定せられざるに因るが如く、國境に在る兩國の民は互に他の領を侵して耕作し收斂す、故に一羊走りて一方より他方に入れば直に之を殺し追ふて之に赴くの人をも併せ傷け或は之を殺す、是れ新聞紙上日に流血の報を耳にする所以、現にスクタリの知事は或地方の境界問題に就き此地に在りとは大臣の余に語りし所、而して土耳其公使の語りて歎息せし所なり。

以太利は鐵道數股權を得、煙草の專賣權を得、國人が墺伊國を厭ふの氣勢二州合併に依り最高潮に達したるの機を利用し國母陛下の關係をも利用して漸次勢力を扶植しつゝあり、ダルマチヤ、モンテネグロ、アルバニヤ等アドリヤチック一帶舊以太利勢力の扶植せられたる一日に非す、新以太利が國内の整頓に從ひ外張せんとして先づ對岸に向ふは自然ならん。

米は萬五千の移民を有するに於て此國と關係ありと云ふべきのみ、英や、佛は巴幹問題に利害關係多きに於てブルガリヤ、セルビヤ及希臘三國は同じく巴幹の一邦として禍源を相分つの點に於て此國に注目するの必要あらん、現に英、米、獨各國公使は或は休暇を以て在らす或は更迭して未だ新任者を見す、相會せしは墺、露、土三公使のみなり。

カタロに歸る

セッチンエーよりスクタリ湖畔に出でウヂルバルより新成の輕便鐵道にてアンチバリ港に出で水路カタロに歸るも亦一策なりしが汽船の

聯絡不充分にて意外の淹留を餘儀なくせらるゝことありとのことに維也納の一老翁のカタロに歸るに會ひリザノ兵村を訪ふの先約もあり、旁兩人一輛の馬車を傭ふことに相談一決し(郵便自動車は積雪猶溶けざる爲め便乘を許さず)今朝五時晨起すれば豪雨沛然たり、前三日間は寒威激烈人は氷雪の上を往來したるに夜來天候俄かに暖氣を增して降雨となる、其變化驚く可し、斯くて兩人相擁して車中に入り雨雪混合の道を往くと約七時間半、デゴシュ驛に小憩して後一時半再び山下の兵村カタロの客舍に入り、船便なき爲め更に一泊に決し、乃ち半日の閑を得て此記を草す。

明朝天晴るれば約を履んでアダミチカ戍營長を訪ひ國境の堡壘を馬上巡閲すべきも降雨猶歇まざらんか直に午後の便船にてラグサに上陸しヘルセゴヴヰナの首都モスタールを經てサラエボに向ふへし。

墺匈國の新領州

十一月廿四日ボスニヤの首都サラエボより

ヘルセゴヴヰナに入る＝鹵輸鐵道＝サラエボの一週間＝新領州の土地人民＝兩州人民の希望＝兩州の過去＝兩州の委任統治＝兩州の合併＝州議會と政黨＝農民問題＝正副議長と議員＝三十一年勤續の老民政長官＝マホメダンに對する穏和政策＝一百の墜道＝ヘレン倶樂部＝木材利用會社＝君は亞非利加より來りしか＝多腦河畔の都

ヘルセゴヴヰナに入る

十一月十六日カタロ師團司令部の特許を得たればアダミチカの東道に依りリザノに到り馬を驅つて高く山頂の堡壘を檢し、國境防備の狀況を視察せんと欲せしも朝來の雨雪は之が中止を餘儀なからしめ、乃

ち下午出帆の定期船に投ず、ダルマチヤのボーラ海上を吹き荒み不快の裏に薄暮船グラボサに着し、直に馬車を飛ふて疾驅、舊の小共和國たりしラグサ市のホテル、インペリアルに入る、此地は新に第十六軍團司令部(ザーラより近く此地に移轉せしもの)の所在地となり英、土、墺等の領事府あり、出でゝ大街を逍遙するに店頭の物、往來の人、多く歐洲式にして、固よりセツチンエ、カタロの荒寥に似ず、更に城壁に上り共和國時代選擧侯の舊城を見る、眇たる方一哩の城、當時の人口四千を出でざりしとは史の語る所、而も百年前迄獨立を維持し得たるは不思議と云ふべし、翌十七日未明早起して背後の山頂に登り俯瞰してアドリヤチックの怒濤を呑吐しグラボサに引返し九時半發サラエボ行の火車に投ず、兩者の間百七十八哩、ダルマチヤ州よりヘルセゴヴヰナ州を横斷りボスニヤの首府に達するもの、一日兩回、十三時間を費す。

此方面の鐵道は有名なる狹軌鐵道(ゲージ二尺五寸)にしてグラボサを發し直に山岳に取り掛りオンブラの水源を俯瞰しつゝ蜿蜒迂山を上ること九哩餘、千尺の高さに至りてダルマチヤ、ヘルセゴヴヰナ兩州の境に達し、守兵の一隊降雪を冒して發火演習を爲しつゝあるを見て邊境戍卒の勇ましき狀況に又しても感興を惹けり、ウスコブリユ驛に至りて海拔千二百尺の上に在り、是より石灰岩層を以て成る所謂ヘルセゴヴヰナのカルスト地方に入り、四圍青色なく落寞の光景モンテネグロの北部と同一體たり、ポポポポリユと呼ばるる窮谷の間を縫ふて進ぐること十餘哩、進んでナレンタ流域に入り、後三時ヘルセゴヴヰナの首府モスタールを過ぐ。

齒輪鐵道

モスタールの人口約萬五千、回民其半を占め守兵二千あり、ナレンタ河を挾みて丘陵の間に擴がり、回教の尖塔約卅、市街を飾り頗る土耳其的

色彩を帶びてサルタン治政時代を偲ばしむ、モスタルは海拔二百尺の比較的低地に位せるが是より更に數哩を過ぎてナレンタ河の山峽に入り地漸く高く風光益々莊嚴なり、デヤブランカの兵村を過ぎコンジカに至り海拔九百三十尺を算す、是より所謂齒輪鐵道となり汽鑵車を前後に連結せしめ蜿蜒の山道を往き三千尺の最高處たるイワンの驛に達す、此驛はヘルセゴヴヰナ、ボスニヤ兩州の境を爲すものにして兩側一帶の山脈は即ち黑海とアドリヤチック海の分水嶺たり、是より西するは後者に注き東するは前者に入る、沿道積雪滿ち寒威激し、而もボスニヤ州に入りて連山森林多く過ぐる所人家亦點在し前二州荒寥の光景に比して稍客魂を喜ばしむるものあり、斯くてイリジエ溫泉を過ぎて夜十時半サラエボに着しホテル、オイロッパに客身を橫ふ。

サラエボの一週間

ボスニヤ、ヘルセゴヴヰナ兩州は一昨年十月五日の宣言に依り伯林會議以來三十年間の委任統治を經て新に墺匈國の新領土となりし所、而してサラエボは其首都にして、千七百七十尺の高嶺に在り、ミリヂヤチカの小流市を兩分して左右に約五千三百尺の高さを有する高山あり、五十餘年前バリス(土耳其時代知事の名)の地位をトラブニックより此に移してより州の中心となり、墺匈國の委任統治に歸せしより市街急に發展し、現に人口約五萬、州總督府あり、第十五軍團司令部あり、州議會あり、羅馬加特力、希臘オーソドックス、回教等各宗派の大本山あり、回民二萬猶太人四千、其他は加特力及オーソドックスの徒なり、守兵三千餘、墺匈國に於ける獨逸人種の勢力次第に減退しつゝあるは曾て之を述べたり、而もボスニヤ、ヘルセゴヴヰナ新領州の人口約百七十萬、少數の官吏軍人及商賈を除くの外大々多數はスラヴ族にして、マホメダンも基督各派も皆セルボ、クロアド人なり、チエック、スラボニヤン、ルテニヤ

ン各種族と共に歐西亞人と其人種を同ふせるもの、墺匈國義に伯林會議(千八百七十八年)に於て英の代表者サリスベリーの提案に依り獨の首相ビスマルクの贊同を經、アンドラッシーの苦心空しからず、幸に兩州の占領並に統治を爲すの權を得てより三十年の星霜を過ぎ一昨年十月に至り獨逸の强援の下に合併を宣言するを得たり、即ち幸に合併を宣言するを得たるも獨人果して能く永遠に兩州を統治するを得るや、統治は則ち爲し得んも果して同化するを得るや、匈牙利及ベーメンの現狀に立至らざるなきか、是れ余の最も知らんと欲する所なり、斯くて首都の第一館に泊し總督府民政長官以下の官憲と會し、州議會の議長以下各派議員と會し、軍人と語り商賈と語り、使丁と談じ、少婢と談じ、或は出でゝ各般の施設を觀、或はマホメダンの集團に至りて其狀況を探り、興趣益々湧いて覺へず一週日を費せり、今夜の列車にてボスニヤを北に横ぎり匈牙利の南部を經てセルビヤの首都を訪はんとするに當り、茲に極めて簡單に新領州の狀況を略報せんと欲す。

新領州の土地人民

ボスニヤの面積四萬一千九百八平方吉米突、ヘルセゴヴヰナ九千百十九平方吉米突合せて五萬千零廿七平方吉米突を算し輿圖の示す如く北はサクロアチユン、スラボニユン兩州に接し、西ダルマチヤ、南東、モンテネグロに境し、東、セルビヤと隣り南東約六十吉米突の間土領のサンヂャック、ノビパザルと相接す、而してヘルセゴヴヰナの地ダルマチヤ州をクレク及ボッカ、カタロの二箇所にて中斷し僅に海に瀕する、人爲的に境を劃するの一例として頗る珍ならずとせず、兩州一圓に山岳地方たるはボスニヤの平均高度二千二百尺、ヘルセゴヴヰナ二千六百尺なるに見るも其一斑を察すべく、黑海とアドリヤチックの分水嶺兩州を兩斷し冬夏寒暑の差激しく特にヘルセゴヴヰナの夏季に至りては

逸山悉く岩層にして樹林なき爲め熱暑最も堪へ難しと云ふ、兩州の人口從つて極めて稀薄僅に百七十萬を算するに過ぎざるは前述せし所、住民を分類せんか、殆んどスラブ人種のみと云ふべく、唯だ宗教に於て相異なれるもの三あり、第一は希臘オーソドックスにして其數約七十二萬、次はマホメダン約五十七萬、羅馬加特力三十七萬、外に猶太人約九千、此等猶太人は中世紀に西班牙及葡萄牙より追放せられたる者の後裔にして多くサロニカに上陸し此方面に移入せしもの、街頭彼等に接して再びイサベラ、フエルヂナンド等の失政を追想し西葡兩國の現狀を羨せざるを得ざりき、住民の殆んど全部がスラブ人種たるセルボ、クロアト族なるを以て土語は勿論セルボ、クロアト語にして露語と類似しセルビヤ人、モンテネグロ人と同系なり、故に地方の公用語のセルボ、クロアト語にして獨逸語に非らざることダルマチヤ州と同じ、即ち獨逸人種は治者としてスラブ人種の上に臨めるなり、セルビヤ人がボスニヤを欲しモンテネグロ人がヘルセゴヴヰナを欲し、而して露西亞が背後の救の神たるは之に依りても一般を察し得べし。

兩州人民の希望

十八日州議會の休日なるを幸ひ、議事堂内の各黨倶樂部（セルビヤ黨、カトリック黨、モッシユルマン黨の三あり）を訪ひ數十名の議員に會し、又議長、副議長とも語りし際、議會の用語は何なりやとの余の問に對し、悉一齊に勿論セルボ、クロアト語なり、吾等州民は獨逸語の必要なし、見られよ、豫算案も議事錄も總てセルボ、クロアト語のみ、議會に列席の政府委員は皆我國語の素養なかるべからず、吾等は獨逸語を用ふるを喜ばずと云へり、重任に在る議長も副議長も然か答へり、各黨派の何れもが然か答へり、特に余が議長（回教徒）室にて議長及一回教議員と語りつゝある際、副議長（オーソドックス派）を排して入り來り余等の會話を遮

り て曰く「然り吾等は各宗派を異にせるも同じくスラブ人なり、同族なり、他人種語たる獨逸語を用ふるの要なし」と廣言せり、州に未だ大學の設備なし、州民の高等教育を受けんと欲するものは維也納其他獨語の大學に入るものあるも多くは隣州クロアチエンの首府に在るアグラム大學に赴くなり、斯くてスラブ大學にスラブ教育を受くるを常とす、州民の代表者たる彼等は勿論大抵獨語の素養あり獨語を解するも獨語に對する感念斯の如し、一般州民は唯土語を知るのみにて獨語を知らざるもの比々然り、少しく鐵道線を離れて内地に入れば獨語は他の佛語、英語と等しく一外國語に過ぎず。

更に多くの人士と會し州民の希望如何と問ふに「吾等の希望は完全なる自治權を得るに在り、匈牙利若くは墺太利と對等の地位に進むに在り、吾等は墺太利若くは匈牙利の何れにも屬せず、ハプスブルグ王家の王領として墺匈及ボスニヤ、ヘルセゴヴヰナ國を形成するに在り、羅州合併の際皇帝は州治の特別關係に立てるを宣言し自治を許し給へり、而も其權限猶極めて狹隘なり、吾等は自治權の大々的擴張を欲するものなり」と云へり、議長の言も副議長の言も皆同一觀に出づ、而して附言して曰く吾等三派は人種を同ふし同じく此州に棲息するもの唯宗派の相異に依り内治に於て所見を異にすることあるも、州の向上を欲するに於て各派共同一致の意見を有すと、州民の代表者たる彼等の希望は則ち州民の希望なり、之を商賈市井の徒に質すも皆同一の答を爲せり、尤も墺匈國に於けるマジャール、チエック、グロアーチン、ルテーネン等の諸種族は獨逸族と固より同權を有するを以て此州に官吏たるもの各種族を混じ現に軍團長アウエンベルヒ男は獨人種なるも總督ハレサニッチエ大將はクロアト人にして民政長官ペンコー男はセルビヤ族なるが如く、必ずしも官海武人共に獨人の專有ならざるも猶獨逸人種は治者の地位に在るものと云ふを得べく、而して

州民が之に慊たらざるは亦已むを得ざる次第なり、兩州に於ける獨逸族の前途は何牙利若くはベーメンと其揆を一にせずんば幸なり。

然らば墺匈國は如何にして兩州を得、如何にして兩州を治めしか、是れ史の示す所にして識者の夙に知るを誤たざる所、必ずしも多く云ふを要せず。

兩州の過去

兩州の地は古へ羅馬時代より史跡に存しダルマチヤとの關係頗る密なるものあり、後第四世紀の末頃ゴッス人の有となり、クロアト人セルビヤ人の侵入之に次げり、州の南西部の基督教を奉ずるに至りしはジヤスチニアン帝の時代にして其他の部分は八百年代セルビヤ教使徒の盡力に依りたるが如し、九百四十年よりボスニヤ一帶選擧侯即ちバンの支配に歸し此等のバンは後何牙利王の幕下となり千三百七十七年に至り、當時のバンはステフアン、トベルトコ第一世の號を稱して初めて王を宣するに至れり、何牙利人が兩州の當然自國に附屬すべきものたるを主張し又今回の併合に際して墺匈帝の宣言書中に『何牙利王位の我等の光輝ある祖先の過去に於ける關係』云々の語あるも此史的關係あるが爲めなり、バンの王號を稱せしより未だ百年ならざるにサルタン、モハメット二世崛起して此州の南部を征服し(一四六三年)次で北西部一帶亦土國の有に歸し、四百餘年治政の基を肇めしも爾來墺土必爭の地として其民復た泰平を夢みるの際なく以て千七百九十年兩國のシストバに於ける平和條約に及ぶ而も猶時に兵戈起り千八百五十年千八百七十五年の兵亂其最たるものたり、千八百七十八年の露土戰爭は兩州に直接の影響なかりしも伯林條約の結果墺匈國の占領統治に歸せり。

兩州の委任統治

兩州の民はスラブ族たるが故にセルビヤ人、モンテネグロ人が各要求權を主張し、露國が暗に盟主として後援を爲し來りしは勢ひの免れざる所、土耳其人が四百年間兩州に滋み其民の半をマホメダン化し其山川風物を土耳其化して以て最近三十二年前に及べるよりして統治權の放棄を肯んぜざるは亦固より然るべき所なるも、既にアドリヤチック沿岸の狹長州たるダルマチヤを自己の手に收め得たる墺太利が其背後に横はる兩州を欲し同種同教のクロアチエンを有する匈牙利が其兄弟州たる兩州を欲するは從來の史的關係と相結んで正に然らざるべからざる所。

墺のラデスキーは千八百五十六年既に一書を著はしてイストリヤ及ダルマチヤ二州を固めん爲め兩州の占領せざる可からざるを主張し、

後十年墺太利チルソンの稱を得たるテゲトホーフ提督はリザ沖の戰勝の後、アドリヤチック海岸防禦の爲め兩州を占有すべきを言へり、先覺者の觀る所略其揆を一にし好機の至るを待ちつゝありしが、希臘を失ひ、ルーマニヤを失ひ、セルビヤを失ひ、ブルガリヤを失ひたる土耳其が兩州に於ける基督教徒に臨むに更に改善の模樣なく、一般に不平に滿てるに隣邦の暗に之を煽動し又一大國の之が後援を爲すあるより千八百七十五年に至り最後の暴動としてヘルセゴヴィナの民先づ鋤を棄てゝ起ちボスニヤ州民之に相應じ、土軍の强壓を試むるや走つて墺匈國領土に逃れ若しくはセルビヤ、モンテネグロ境内に遁れて援を各其欲する所に求め、大に歐洲基督教國民の同情を惹けり而して墺の名相アンドラッシーは此機を逸するの愚物に非ず、或は露と近づき或は獨と結び兩州に臨む所以の道を講じつゝある間に千八百七十八年露土戰爭となりサン、ステフアノ條約に對する英獨諸邦の惡感は驅つ

て伯林に於ける列國會議となり、茲にボスニヤ問題は其第八回會議に於て議題に上りアンドラッシーの怪腕に依り英のサリスベリー獨のビスマルク等、兩州を墺匈國の委任統治の下に置くべきを承認し露、佛、以亦之に同意を與へ土耳其の抗議に拘らず確定議となるに至れり。然かも兩州に於ける回教徒と土國官憲とは容易に此議に服せず、是に於て同年八月ヒリポウヰチ大將はヘルセゴヴヰナに進軍し數箇月の惡戰苦鬪を經て僅に能く州内を平ぐるを得たり。

墺匈國の兩州に委任統治權を立つるや翌七十九年十二月の法律を以て母國に對する兩州の關係を決定し、兩州を以て墺匈國の關稅及び通商區域内たるを宣言して先づ通商上の境域を撤し、次で八十年二月の法律を以て兩州統治の方法を定め、同九十年十二月に至り更に兩州民に兵役の義務を負はすることゝなり、墺匈國共同大藏大臣の下に州政を擧ぐるに努め以て一昨年併合の時に及べり。

兩州の産物木材を第一とし煙草、砂糖を出し、石炭、鹽あり、鐵、銅、マンガン礦あり、政府は先づ鐵道を敷設して交通を便ならしめ其延長千三百吉米突に及び兩州の首要都市を聯絡し、東は遠くセルビヤの國境より土耳其の國境に及び、アドリヤチック海に出づるもの既に二線、更に第三線としてブゴイノとスバラトを接續するの計畫を爲しつゝあり、國有鐵道の外に私營に係る所謂森林鐵道に至りては所在の要樞たる幹線の一地點より左右に分派せられ其延長亦數百吉米突に及び、郵便通路は州内通せざるの地なく教育に宗教に衛生に勸業に森林業に牧畜に工業に財政に信用機關に立法に建築に各方面に亘りて三十年間に施せる所頗る著大なるものあり。

政府は千九百六年以來毎歲兩州に關する行政報告を公刊することゝなしつゝあるが就て之を閲すれば其治蹟の概念を得べきも今は之を詳叙するの隙なし。

兩州の合併

斯くて委任統治の三十年は兎も角も土耳其治下の時に比して面目を一新し、墺匈國の兩州に於ける治蹟は列國をして之が統治權の永久維持を承認せしるるに足るものあり、一昨年春頃より青年土耳其黨の勢力表面に勃興し來り憲法の復活、國民の自主自由を絶叫するに至りしより墺匈國の政府は獨逸の強援を楯とし露國の兵力猶全く恢復せず土耳其の憲政未だ全く成らざるに乘じ突如として勃牙利(ブルガリヤ)の獨立宣言と相前後し十月五日を以て兩州の合併を宣言し列國の承認を經ぬ、而して兩州は墺匈兩國の何れにも併合せられず、唯ハプスブルグ王家の主權を兩州に擴大し、從前の形式に從ひ依然兩國共同大藏大臣監督の下に州總督府を設き州議會を設け特別の行政區域として自治を許すことゝし本年二月に至り之に關する各般の法律を制定公布せり。

墺匈老帝既に兩州を王領とし其行政組織を改めて州民に參政權を與ふることゝし本年五月を以て初めて首都サラエボに行幸し衆民の熱誠なる歡迎を受けられたり、當時國内の輿論は此盛事を謳歌したるが、之と同時に是を以て兩州統治に新紀元を劃するものとし、老帝の行幸は兩州統治の一終點にして又一起點なりとし、未來に横はる論件の多きを列擧し先づ農民問題を擧げ次に産業奬勵、鐵道問題等を指示し老帝の善政を望みたるが如し。

州議會と政黨

老帝行幸の後間もなく第一期州議會を開きたるが一時閉會し更に本月七日を以て召集せり、余は幸に此機に會し仔細に其狀況を看取するを得たるなり。

議會の權限、議員の選擧、議事法等發布の法律を點檢すれば流石に兩州

に適合するに苦心せしの跡見へ一種特別の組織なり、議員の總數九十二名内二十名は法律に依り當然議員として議場に列するを得るものにして即ち回教、オーソドックス、加特力三派の大僧正、教務總監等各五名外に高等裁判所長官、アドボカート長官、サラエボ市長、猶太教主長、及びサラエボ商工會議所會頭(此會議所は官設なり)の五名計二十名は當然議員たるの資格を有し普通議員は三派信徒の數に比例して選出せらるゝものにして、即ち第一の多數を有するオーソドックス派三十一名(通例此派をセルビヤ黨と稱す)回教派二十四名、加特力派十六名、之に一名の猶太議員を加へ七十二名たり。

議長一名、副議長二名は三派より各一名宛皇帝より勅選せらるゝものにして議員の年限五年、毎年議長副議長を順番に三派より勅選せらる、本年第一期の議長は斯くて回教徒より選出せられオーソドックス派と加特力派より各一名の副議長を得、明年はオーソドックス派のもの議長に他の二派のもの各一名宛副議長に而して明後年は加特力派のもの議長に他の二派のもの副議長となる理なり。

議事堂は新設せらるる迄市廳の階上を以て之に充てられ、往て之を見るに三派別に倶樂部を院内に有し各黨議を凝らしつゝありたり、元來兩州に於ける黨派は合併の前年即ち千九百七年十月オーソドックス派の者相集りてセルビヤ國民團體を組織し次て翌年八月回教國民團體の形成を見たるに始まり、兩派の黨員は連署して墺匈國共同大臣ブリアン男に覺書を提供し州に自治制を布き行政組織を改めんことを請願したるが幾くもなくして合併の宣言となり、本年二月の法律公布となり第一期議會の開會を見るに至りたる次第なり、加特力派も次で起りしが彼等は要するに宗派の相異るに依り派を立つるものにして(一名の猶太議員はセルビヤ黨に席を列ぬるも固と勝敗の數に入らず)其種族を同ふし、州民共同の希望として自治權の擴大、兩州の事實

的獨立を欲するものなることは前に述べたるが如し。

農民問題

夏の議會は總督府提出の豫算案に多少の削減を試みたるのみにして大體初期の議會として平穏に經過し來りたるが茲に回教派と他の兩派と亘溝を穿ち到底一致する能はざる問題は則ち農民の土地所有權問題なり。

サルタンの治下に在る四百餘年、回教徒のベク、アガ等貴族並に富豪は土地を兼併し一般農民はクメットと稱し唯地主の土地を小作し得るのみにして土地の所有權なく以て委任統治の時に至りしを以て、現在の土地所有者の大部分は回教徒にして農民の多くは基督教徒なり、故に墺匈國の此州に臨みしより基督教民の愁訴に聞き成るべく農民に土地を附與せんと努めざりしに非ず、本年の公報を見るに占領の翌年

より昨年末に至る三十年間に土地の農民即ちクメットの有に移りしもの二萬六千二百二十一件、其價額二千二十五萬九千五百七十四クローチに及び、特に合併後即ち昨年は千五百三十九件其價額二百萬二千九百クローチの土地のクメットの有に歸せしを見る、勿論此等の買收資金の六割はボスニヤ、ヘルセゴヴヰナ土地銀行(六千萬クローチの資本を有し私立なるも特權を附與せられ居る大銀行)の支出に屬し他の二割は公私機關の手に依り、クメット自己の囊より支出せしものは二割に過ぎず、斯くて州内の土地漸く農民の手に歸しつゝあるは統計の明に示す所なりと雖も、基督兩派の民は之を以て滿足せず、政府より年々土地買收資金を支出せしめ速かに農民一般に土地の平均分配を了せんと欲するなり、而して曰く農民は自己の耕すべき土地を有せず、收入の三割は之を地主に他の三割は之を租税其他に吸取せられ僅に殘餘の四割にて生活せざるべからざるを以て產業興らず生計立ず墺州

を擧げて今日の窮境に沈淪せしめたり、之を救ひ此州を富まさんには先づ土地を所有せしむるを第一義となすと、而も回教派は自家の利害よりして之に反對し是れ私賣買に依つて決すべきもの從來と雖も地主にして其所有地を、クメットに賣却するもの年々巨額に上る、若し多くの地主にして多くの土地を農民に賣却せんか、乃ち問題は自然に解決せらるゝも、地主の欲せざるに之を強賣せしめんか、是れ私權を蹂躙するものなり、要するに此問題は政府の干渉すべき問題に非ず從つて政府に此等の資金を備へしむるが如きは大反對なりと云ひ互に相下らざるが如し、此間に在りて總督府の態度如何と云ふに內心多少の理を認め情を察するも強て土地の賣却を地主に迫るべきに非ず、且之を強行せんか回教徒の激烈なる反對を受くること必然なるを以て寧ろ前者に反對の態度を取りつゝあるが如し、此點に於て總督府が現に基督教派の不滿足を買へるは是非もなけん。

本年度の豫算歲入總額七千四百三十二萬餘クローネ、歲出七千四百二十九萬七千餘クローネにして現に現府提出の明年度豫算は歲出七千九百四十八萬二千餘クローネ歲入七千九百三十三萬二十餘クローネを計上せり、即ち我三千百餘萬圓の豫算にして朝鮮總督府の豫算に比して約四五割の多額に上れるを知る。

正副議長に議員

第一に勅選せられたる回教派の議長ヒルダスは任命後病歿し遺像空しく議長室の壁間に掲げられあるを見たり、今の議長名をパシャキッチと云ひ四十餘の壯歲にして夙に維也納大學法科を卒業したる回教徒中の秀才なり、彼れ快よく余を延て快談し偶々同席の同派議員キャミルと共に余に向つて曰く「本日愉快なる新聞を得たり、貴國東京には我回教徒に依りアラブ語と英語とを以て發刊せらるゝイスラムの機

關雜誌ありと云ふは眞乎」と余は是れ恐らく埃及人ファドリーなる者の發刊する所ならんファドリーとは兩三回會合せしとありと答へたるに大に喜色あり、回教徒は亞細亞、歐羅巴、亞非利加三大洲に擴布せられ其數無量三億漸次興起の兆候あり貴國之が牛耳を執るべしと云へり、余は日本には一名の回民を見ずと答ふるの無益なるを思ひ話題を他に轉ぜる際、前日親しく會見して其抱負を聞知したるセルビヤ黨の副議長ショーラ入り來り、談は兩州人民の希望如何の問題に移りたるに、彼等三人等しく昂然として曰く、我兩州は埃匈國のコロニーに非ずしてモナルキーの共同體なり、兩州に國內的自治自主權を與ふるは帝の明かに宣言せられし所、而も議會の權限狹小にして自治の範圍亦狹小なり、吾等は宗派の區別なく自治權の擴張を望み、王と人民との直接、州民の個性の向上を希望し、此點に於て埃匈國識者の同情を求むるものなりと、暫くにして去つてセルビヤ黨の倶樂部を訪ひ次に加特力次に回教派と順次に彼等を訪ひしに集り來るもの十餘人若しくは數人、皆欣然余を迎へボスニヤの珈琲なりとて漆黑色のものを薦め卓を隔てゝ話る所多く同一調に出づ、唯彼等は獨逸語を用ひ獨逸化するを好まざるも埃匈國に合併せられしに就ては甚だしき不平の色なきが如く、偶々之を問ふあれば是れ一時の政治的出來事のみ、余等は兩州の發達と平和とを希望す、今は切りに州の繁榮を計るの時なりと云へり。

三十一年勤續の老民政長官

總督府へは數回の訪問を爲せり、總督は陸軍大將を以て之に充つるの官制にして委任統治の名殘を存し現任總督のハレサニッチエ大將たることは前に述べたり、而も行政の一切は民政長官（チビル、アドラタス）と稱すベンコー男の手に在り、行政、司法、財務、建築の四局に分つて政務を分掌しつゝあり、ベンコー男は六十四五歳とも見ゆる老齢なるが彼

は四十一年前最初の埃國公使に副官(彼は當時海軍士官たり)として隨行日本に渡來し江戸にてミカドに拜謁したりと云へり、兩州が埃伺國の委任統治に歸するや間もなく一微官として此州に臨み今日の地位に至る迄三十一年間勤續せり、彼れ曰く、余は此州に在る既に三十一年青年にして邊州に吏となり如今白頭翁たり、而も身心幸に猶健なり余は死にいたる迄此州の統治に微力を致さんと欲す、新領土に於て官吏の更迭頻繁なる佛國の如きは策の得たるものに非ずと、寔に然り、斯くて彼は古領當時に於ける民政の苦心を語り、回教徒は他の基督教徒と其種族を同ふし曾て同教徒たりしものゝ土耳其時代に回教化したるに過ぎざるに、保守にして回教を信奉するの深き却て土耳其人に優るものあり、彼等は我が治に服せず其子弟を學校に送らず、之を慰撫しつゝ文化に導くに多大の勞苦を爲せるも今や少しく可なりとて何等掩ふ所なく各種の問題を說明し余を益せしこと尠少ならず、之に就て思

ふ當總督府官吏在勤の年數長きは獨り此老長官のみに非ず、余の會見せし建築局長ミコリーも既に在勤二十六年、森林課長のプベルも二十年、行政局長のピットテル男も二十年、司法局長のシュックも二十年に及べるを知り、フォドルなる三十四歳の壯年副書記官さへ既に勤續九年なりと云へり、一利一弊は自から數の免れ難き所なりとは云へ此州中央官吏の在勤年數が大抵長くして其長官たるベンコー男の三十一年に及べる最も喜ぶべし、而して骨を此所に埋めんと傲語するに至りては更に欽すべきを見る。

マホメダンに對する穩和政策

州政廳の教育普及に腐心し來れるは云はずもがな、國民教育、實業教育、師範教育、中等教育、女子教育等に關する學校の設備一通りは既に整頓し更に宗教々育に就て見るも、多數の基督教普通學校の外、特にオーソ

ドックス派の爲めに設けたる高等宗教學校あり加特力派の爲めに設けたるプリエスト、ゼミナルあり、各數萬の歲費を擲して其宗派青年の教育を奬勵しつゝあり、敢て珍らしとするに非ざるも回教派の爲めに盡せる努力の頗る外人の感を惹くものあり。

一日回教派代議士キャミルの案内にてセリアート、レヒテ、シユーレ即ち回教法律學校を參觀す、山腹に位する壯大の建築にしてマホメダン青年のメドレツセを修業したるものより選拔して年々十名内外を收容し回教法律を主とし、一般の法律、地理、歷史、算數等を修業せしむるものにして設立以來既に二十八年、多數の教育ある回教民を出せり、修業年限四箇年毎日の授業五時間にして現に生徒の數四十七名、毎生徒に月額四十四クローチ(即約十七圓五十錢)を官給し教授七名、生徒は悉く之を校内の寄宿寮に泊せしむ、導かれて之を檢するに毎一名に一室を與へ食堂、休憩所浴室等の設備完全せざるなく試みにアラブ語の地理書に就て日本の部を指示せしむるに臺灣樺太の既に日本の版圖に歸せるを記憶せるは勿論生徒は皆朝鮮の我有に屬せしを知れるも可憐なり、政府の此校に費す所昨年は五萬六千クローチ本年は六萬五百八十クローチの豫算なり。

敷物類の手細工の回教民一般の家庭工業たるは回教各國を通じて然る所、波斯、土耳其の緞通は其名特に高くアルゼリヤに於ても佛人の之が奬勵を爲せるを見たるが此州に於ても占領當初より特にこれが改良奬勵に努め之に關する官立の教習所兩州に十三箇所女工三百六十餘名あり、中サラエボの教習所には生徒の數八十、必ずしも回教の女子のみならざるも彼等其多數を占め、修得の後は各鄕里に歸りて自宅工業に從事するものなり、政府のこれに費す年費は二十一萬五千クローチ内外なるも女工の編みし敷物の賣上代金平均二十一萬八千餘クローチに上り優に收支相償ふの狀況に在り、レース、窓掛、机掛等の製作を

教授する教習所もあり生徒の總數百五十名に及ぶ、其に參觀したるが模樣の如きアナトリヤ式、土耳其式、波斯式等あり又ボスニヤ式のものあり新模樣を編出せるあり斯くて斯業の發達逐年著るしきものありと聞く、更に金物細工を練習する學校もあり多く回教の子弟を收容するものにして銀器、銅器、貴銅器、鐵器、木器等の精巧なるものを製作す、此校に費す所年額約五萬八千餘クローヂ、其校長はレギールング、ラートにして好個の老翁なり、彼は我邦に於ける斯業の精巧を極めたるものあはるを知り、之を學生に修得せしめたし抔語れり、以上諸學校の學生總て官給にして卒業後と雖も何等の義務を負擔せしめず、之を各地に分布して工業の發達に補ひあらしめんと期する所、國民に對する一大慈善的設備たるを失はず、更にキャミル代議士に導かれて回教宗務本部を訪ふ、其教育部長にして財務部長を兼攝せる某は兩州に於る回教の最高位に在る人にして議會のビリル議員、法律に依り議員の資格を

有せるの一人なり、此人詳かに墺匈國皇帝が兩州回教の宗務行政の自治を特許せし事實を語り、吾等は回教法律を以て州内の回民に涵み、冠婚其他の社會的事件を主宰し、學校を設け、回教法の命ずる裁判を行ふことを得正しく私立政府なりと笑へり、此特權は昨年四月皇帝の允許せられたる所にして同年五月より實施せりと云ふ、斯くて宗務本部は之が費用を回民より徴收するの權を公認せられ、昨年五月より十二月に至る八箇月間の收入二十九萬二千餘クローヂに上り、宗務本部の財産は動産不動産を合せて約一千萬クローヂを有す、本年度の豫算收入七十萬千二百六十六クローヂ支出七十七萬七百四クローヂなりと云ふ、斯く巨額の財産を有し又費用を回民に賦課し年の豫算七十萬以上を以て自治制を教民の間に布く、隱然たる私立政府の觀あること勿論にして回民は之に依つて安を得、依つて以て大に誇りとする所、墺匈國政治家苦心の存する所として褒めて取らすべし、

一百の隧道

ボスニヤ、ヘルセゴヴヰナ鐵道の狹軌にして所謂山中鐵道として有名なるは多く人の知る所、官線の外木材運搬の爲め私設會社が到る處森林鐵道を連山の間に敷設せるも亦少しく之に留意する者の知る所、臺灣阿里山森林經營の針盤は此州の森林、此州の鐵道に範を採りしもの、ラグサよりサラエボに至る百七十七哩の幹線を通過して山中鐵道の一斑を視察するを得たるが、更にサラエボよりセルビヤ及土耳其の國境に達する鐵道こそ此州に於ける第一の難工事にして人力を以て天然を征服し、最も近代科學の力を應用したるもの、加ふるに沿道の勝景を以てす、此二點に於て曾に此州に冠たるのみならず世界に於ても既成鐵道中稀に見る所のものなりとのことに一昨日午前六時四十五分（一日兩回）を以て當市を發し後一時土耳其國境の最端驛ウハッに至り、

同府發の列車にて直に引返し同八時半歸來せり、サラエボよりメジュジャに至る百十一吉米突之より二線に分岐し一は更に三十二吉米突を過ぎてセルビヤの國境ハルデヰシテに達し他は四十二吉米突を隔つる土耳其の國境に達す、此延長合せて百八十五吉米突、隧道の數正に一百、工事費一吉米突に五十萬クローネ（約二十萬圓）を要せしとは鐵道技師の余に語りし確實の談なり、沿道山又山、隧道又隧道、崖又崖、些の平地を見ずスタンブルチッチ驛に於て全線中の最高點（三千一百餘尺）に達すサラエボより東し十數哩は森林と稱すべき程のものなかりしも東の大半沿道の連山には大森林あり巨幹大木多し、此日午前降雪甚だしかりしが途中の一驛プラッアにて衛兵が大雪の裡、山麓に於て練習せるを見たり、同車の客は匈牙利人にして陸軍大尉たり、今回新に命せられ土耳其國境の一駐屯中隊長として赴任の途に在るもの、彼れ邊境生活の單調にして苦痛なるを語る、今衛兵の雪中演習を目擊し又彼の

語を聞き重ねて戍兵難を思はざるを得ざりき、匈牙利大尉、ウスチプラッア驛に下り(彼は是より馬車にて國境に向はんとする者)鐵道技師の代りて、乘込み來るあり。

メジュジャ驛にて乘換を爲し往く、幾くもなくして兩線の分岐點に達し二隧道の道を分つを見る、技師は此州の生にして能く談ず、曰く此鐵道は千九百六年即ち合併に先づ二年既に完成せしも工事の困難なること空前なりしは一吉米突に半百萬を費やせしにても之を知るべく、見らるゝ如く此地方は木材の外何等の產物なく此鐵道を延長してセルビヤ若くは土耳其のモナスチール鐵道に聯絡せしめんか產業の發達行客の便利に多少の貢献あらんも是れ兩國の嚴に峻拒する所、加ふるに國境は閉塞せられて相互の往來を許さず、故に年々の損失は頗る巨額に上る、政府は唯國境防備上の必要より敢設せしのみと、合併當時に於ける此地方の狀況を聞くに墺匈國の防備は未た完からざるものありセルビヤ兵は兩線の分岐點迄侵入し來りしも幸に兵戈を交ふるの事なくして止みしと云ふ、メジュジャより走ること三十吉米突にして土耳其との境界線に達す一谿水を隔てゝ兩國の戍樓あり、聞く二週日前此境界線に於て兩國住民の所有物の爭ひより衞卒相互の發砲となり三人の死者を出せりと、國境の小爭はモンテグロと土耳其との國境に於ても此州に於ても亦セルビヤに於ても常に其跡を絕たざる所、地を割し民を限りて血を以て相爭ふ愚なる哉。

ウハッ驛に達して一基督教僧侶の他の客車より降るを見る、想ふに此邊境の戍卒住民に福音を宣傳するものならん、此宣傳の結果が爭ひの種となること是非なけれ、午後に及で雪歌み小憩して更に歸行の列車に投じ一百の隧道も瞬時に過ぎて同夜再びサラエボ客舍に入る。

ヘレン倶樂部

二十四日はサラエボ出發の日なり其朝ボスニヤ土地銀行に至り旅銀を引出すに支配人余の日本人なることを知りて珍らしがり、懇懃余を迎へ余の滯在期を問ひ今夜行車にて出發する旨を答へしに何故に早く訪ね呉れざりしやとて遺憾に堪へざるものゝ如く、銀行の資本金六千萬クローヂを擁し種々の特權を附與せられ居る新領州最大の拓殖銀行なることを語り其營業報告定款の類を贈り、刻偶々午に及べるを以て余をヘレン倶樂部に案内すべしと云ふに伴はれて河畔に至る、該倶樂部はサラエボ社交の機關にして一大建築なり、讀書室、遊戯室、圖書館、食堂等悉く整頓し流石は塊匈國人なりと思はしむ、支配人一々列座の紳士に余を引合せ共に食堂に入りて會食す、聞けば一食僅かに六十錢なるに四種の洋食に半リートルの葡萄酒を供するを見る、頗るの廉價と云はざるべからず、座上の人、職員あり、銀行員あり、教師あり、僧侶あり、武官あり、總督府のミコリ局長も亦在り、支配人余を僧侶に紹介するに當り『此人は露國から來たんです』と云ふ、希臘オーソドックス派の坊主にして日本と露西亞とは直に彼等聯想の材料となるらし、左るにても倶樂部組織は獨り歐人の專有なり、家族本位の東洋にては中々に發達困難なり、御恥しながら東京の二三倶樂部も其設備に於て其規模に於て之に優れりとも思へず、昨今の臺灣は知らず半島の中心たる京城の倶樂部の如き往年之が設立を見しも今や營業の人に賣飛ばして初めて繼續せらるゝあり、家族本位の東洋に於て倶樂部主義の發達せざるは寧ろ賀すべく益々家庭團欒主義を助長せしむべしと云ふものあり、遮莫あれ此等の得失は別問題として少くも吾等旅行者に取りては倶樂部は頗る便利なり、特に倶樂部の設けなき小都會小町村にては其地のホテルが則ち倶樂部の代用をなし行旅の客をして坐して其地のあらゆる階級の人士と接觸するの機を與ふ、此日此倶樂部に至り諸人と會し又其設備の整へるを見て一言之に及ぶものなり。

木材利用會社

同夜十一時十五分發の火車に投ずるに二等客滿員とのことに一等室に入り直に臥す、ボスニヤ鐵道は一二等共に兩座を連ねて寢臺となし幔幕の之を限るを得るあり、寢臺車を聯結せざる代りに此種の便利あるものと知らる。

前便に記せし如くボスニヤは森林の國、森林及び其鐵道は林學者鐵道技師の必見を値するの所、殊に土耳其國境に世界唯一とも云ふべき山中鐵道を視察したる余は、更に木材利用の大會社を一訪せんと欲し翌二十五日朝五時半ウゾラと呼ぶ一寒驛に下り驛前の小茶店に憩ひて夜の明くるを待ち森林鐵道に依り十六哩半を馳りてテスリッ村に達す、ボスニヤの山又山の間を經て此に至り多少の平地を見る、沿道丘陵の中腹に人家散在し農耕又普し、此地方一帶に新町村を除き大抵人家

の平地よりは寧ろ山中に在るもの多きは數百年來の習慣として防禦上の必要より然るなり、此は曾にボスニヤのみならずモンテネグロにてもセルビヤにても土耳其、ブルガリヤにても巴幹列邦の農牧の村皆同一調なり、各宗派を異にせる彼等は村中に雜居し若くは互に一團となり、家内團結して外敵に抗し子孫相受けて相和せず、此點に於て臺灣の生蕃の進化せしものと云ふべし、同乘の客は猶太人にしてテスリッの商賈なり彼れ在住既に二十年、好んで政談を爲しヤホメダンの侮るべからざるを說き、現に第一期の州議會に落選したるアデメガ、メシュトの次期に現はるゝあらばボスニヤの山川風靡すべしと云へり。

事を下り直に總督府の公文を示して利用會社の支配人に會し一技師の案内にて工場を一巡す、此會社の總本店は獨逸に在り、米國、匈牙利等に工場を有する十七箇、此工場の資本金のみにても五百萬クローネ、總督府より租借せる國有林の面積數百平方吉米突、私設森林鐵道を有す

る百五十吉米突、山中に在る人夫一千、工場の職工六百人、山毛欅材より木精、木醋酸、木炭等を製作し就中木炭の製出を最とす、其方法は嚴に秘密を守り工場の如きも特別の紹介に非ずんば一切外來人の入場を許さず、創立以來十四年、年額數百萬に上り年配當四分乃至一割以上に及ぶと云ふ、化學を應用して木材を商品とするの道は漸次に開くべきも大規模の工場は本會社を第一位とすべし、

會社の食堂にて役員と倒座午食を爲し後四時更に引返してツゾラに歸り北行の火車を驛前のホテル、ベヲチヤに待合はすこと後半に及ぶ、驛長其他數名の村夫子階下の食堂に來り集まる、一場の會話宜しくあり、今や日本人の名は如何なる僻陬にも聲き渡り之を七八年前の會遊時代に比して頓に肩身の廣きを覺へしむるは各國を通じての旅行中の感想なり、第一次の遊は日清戰後、北清事件後なりしに拘らず苟もすれば支那人と間違へられたるも今回の遊チヲーセと呼ばれたるは伯林に滯在一箇月間に兩三回のみ、北亞非利加に西班牙、葡萄牙にポスニヤ、ヘルセゴヴヰナの僻地ですら余を一見すれば直に日本人なりと推し先づ敬意を拂ふが如く、責任も中々に重きを覺へしめたり。

君は亞非利加より來りし乎

然るに茲に可笑しきは亞非利加の黑奴と間違へられたること一日二回に及びしこと是なり、之は例外なり、同夜十二時ツゾラを發しポスニヤの境を越へて伊牙利領に入り、ポスナブロットに下車してセルビヤ行の汽車を待合はせしは曙朝の四時頃にて天未だ明けず、寒威激し、傍の一旅客クロアト人らしきが余を顧み獨逸語もて『今日は大變寒からずや』との間に余は『然り、大變寒い』と應へたるに彼は特に余に同情するものゝ如く余を凝視しつゝ『君は亞非利加から來たか』と云へり、除りの馬鹿々々しさに暫らく默して答へざりしに彼は更に『英吉利人か』

と問へり、蓋し余が亞非利加人かとの問に答へざりし爲め聊か敬を失せしとでも思ひしものか、亞非利加の英吉利人かと問返したるものにして余は全然黑奴と思はれたるなり、亞非利加の英領黑奴が英人なりと稱し佛領土人が佛人なりと稱するは猶臺灣人が日本人なりと稱し朝鮮人が日本人なりと稱する如く些の差支なき所なるも、亞非利加の英吉利人視せられたる余は餘り名譽にも非ざるなり、尤も之は夜中の事なり電燈燈下の事なりとして白晝一婦人に黑奴視せられしに至りては更に珍として此に特筆するの可笑しさを忍ぶべからざるものあり、火車プロットを發せば向牙利の平原眼前に展開し沃野千里の概あり久しく山間の僻境に蟄せし身の特に快感を覺ゆ、ビンコーチ驛にて再び乘換を爲しインデア驛に至り三たび乘換の爲め下車せし時は正に午前の十時、待合室に入るに、三四少婦の一卓を圍みて坐し喜々せるあり、余之に接して一椅を占むるに此輩はマサカ余を黑奴視せざりしが如きも、後より入り來りし仲間の一少女余を瞥見し小聲にて『黑奴？』と叫び仲間の者に確答を求むるものゝ如し、余は半ば笑を忍び顏面を抗して「ヤー、ウォール」とやらかせしに彼女は初めて其の然らざるを悟りしものゝ如し、果然余は白晝クロンボ視せられたるなり、曾て中央亞細亞に遊び屢々キルギース人と間違へられたる時には御尤もと首肯せざるを得ざりしも日露戰後の今日到る處日本人の肩身廣き今日に於て一日に兩回も黑奴視せられんとは余の思ひ設けざりし所、インデヤ驛にて印度人と間違へらるるはまだしもクロンボと間違へらるゝに至りては七箇月間の征途、二萬四千哩の山川に親しみて御面相の頗る變化したるものあるならんとは云へ、甚だ以て恐縮至極と云はざるべからず。

多腦河岸の都

インデヤを發して間もなく伊牙利の南端驛セムリンに至る、一帶の大江を隔てゝセルビヤの首都ベルグラット目睫の間に在り、セムリンにてセルビヤ巡査の車中に入り來りて旅券を一見せんとを乞ふあり、既にしてセムリンを發しセーベ河上の鐵橋を越へ迂回してベルグラット停車場に達せしは下午零時半、此にて稅關檢査の外に捕吏の旅券を檢し宿所、姓名等を手記するあり、終つて折柄の大風雪を侵して車を市の中央に驅りグランド、ホテルに投ず、多腦(ダニユブ)は歐陸の大河、獨、墺、伊を經、セルビヤ、ブルガリヤ、ルーマニヤの境を過ぎて黑海に入るもの、明治三十四年の夏曾て維也納より此江を下り、伊牙利、セルビヤを經てルーマニヤのチユリン、セベリンに至る約七百哩、仔細に沿岸の風光を賞するを得たるが、船ベルグラットに至りし時は、既に日沒後にて翌朝直に發程せし爲に十分の視察を遂ぐる能はざりしに九年後の今日再び此地を訪ひ河頭の舊土耳其僕壘に上りて眼下に多腦(ダニユブ)の大江を瞰し遙にセムリンを盥み更にベルグラットの背景を顧みるに形勢雄渾、多腦河畔の都市中、正に第一位に在り、維也納は固より歐陸第三の大都としてカーレンベルヒ山上の景雄大と云ふ能はざるにあらざるも河水市の北を流れて頗る平凡なるを免かれず、ブタペストは河を隔てゝ立ち、河畔の宮城壯觀ならざるに非ざるもベルグラット城頭の遠望に如かず、此夕風雪の止みたるを機とし獨り舊城頭に躡して伊、塞兩國を遠觀す自から雄心の胸中に躍るを禁ずる能はざるものありたり、多腦河畔の都、形勝に於て余はベルグラットを推す、宜なり此地が歷代必爭の城たりしもの、遠く羅馬時代には第四レヂオンの中心たりビサンチン時代には、ブルガリヤ、セルビヤ兩種族の爭點たり、千三百四十三年セルビヤ唯一の英雄ステファン、ヅサンこれを領有せしも一旦伊牙利の手に歸し又之を奪還し千四百廿四年更に伊牙利の有となりしも千五百廿一年土のソリマン二世の降す所となりサルタンの治下に在る百六十七年、千

六百八十八年バイエルンの太公マキシミリアン五萬三千の大兵を提げて此地に殺到し之を拔きしも越へて二年土の宰相ムスタファに奪還せられ、次で千七百十七年ユーゼン公之を取りポラセリッツの條約にて墺國の領となりしも千七百三十九年のベルグラット條約にて復た土耳其に歸し、同八十八年より九十一年に亘る墺土戰爭に兵戈の巷と化せしも依然土領に殘り、千八百四年セルビヤ人のサルタンに對し叛旗を翻すや同六年其手に歸せしも同十二年ブカレスト條約にて三たび土耳其の治下となり同六十二年の動亂に又々全市砲火に包まれ、同六十七年四月列强の干涉に依り土耳其軍の城砦を引拔げて南歸するあり次で獨立國の首都として新生命に入りしもの、算へ來れば此地が如何に形勝を占め歷代爭奪の地たりしかを想見すべし。(以上四項十二月八日土京に於て記す)

巴幹の二邦

十二月八日コンスタンチノープルに於て

跨大狂の國＝塞耳維(セルビヤ)の議會＝國中の富＝愉快ならざるベルグラットの二日＝何んと言ふも未だ巴幹＝ソフヰヤのグランド、ホテル＝三十年の新都＝ソフヰヤ政界の今昔＝國會＝大臣の重責＝勃加利(ブルガリヤ)の跨と書店＝露西亞は叔父サン＝マホメダンの少き所以＝大藏大臣と語る＝貿易と歲計＝君士坦丁堡に向ふ＝國境の夜半＝延着は常事＝雨雪の一箇月＝二萬四千哩の程

跨大狂の國

由來巴幹列邦の民の跨大思想に捕はれ居れるは古よりの史跡之を證す、南スラブはスラブ本家の質實なるに似ず餘りに血の氣多し、モンテネグロ然りブルガリヤ然り希臘然り而してセルビヤを特に甚だしと

す、彼等の夢想は大セルビヤ帝國の建設に在り、ステファン、ヅサン、古帝國の再現に在り、ヅサンはセルビヤの國民的英雄なり、彼は千三百三十一年より同五十五年に亘る二十四年の間にマセドニヤ、アルバニヤ、テッサリー、北希臘、ブルガリヤを征服して巨然たる巴幹の統一帝王として同四十六年自らツアール(王の王の意)の稱號を冠し王國を帝國に昇せし漢なり、午食後博物館に至り階上の繪畫陳列室に入り先づ目を驚かすものは一帝の諸臣に擁せられて王冠を戴かんとするの大額にして云ふ迄もなくセルビヤ畫工の筆に成りヅサンのツアール即位式を實寫せしもの、案内の館員之を指して誇色あり、成程と感心しつゝ街頭に出で王宮の前を過ぐるに當年の王宮は今や一面の庭園と化し新宮巍然として其傍に聳へ王族の中空に翻々たるを見、更に佇立熟視するに庭園の一隅に一小屋あり十字架を戴く、之を傍人に聞くに、舊王宮はアレキサンダー王其妃ドラガと共に其股肱の士官に弑せられ新王ピ

ーター位に即きしより之を取り毀ちたる跡なりと、此悲劇は正に明治三十六年七月一日の出來事にして、何故に王、妃共に斯る不幸の最後を遂げられたるかに就ては當時世界に傳へられし所、其近因は多々ありしなるべし、妃ドラガは王の母君ナタリーの侍婢たりしもの王の寵を受け一朝王妃の尊に上りしも其器に非ざる爲め輿望を失ひしことも一因ならん、而も其遠因はアレキサンダーがセルビヤ人の虛榮心誇大思想を滿足せしめず、寧ろ墺露兩帝の旨を受け巴幹の現狀を維持する爲め其民の大セルビヤ思想を彈壓せしに在りと云ふべし、時の王にして若し能く國人の大セルビヤ思想の潮流に棹して之を善導するを得ば可なるも然らずんば王位は噴火山頭の危に在るが如く、歴代セルビヤ王中誰人か能く晩年を全ふせられしものぞ、現王の祖カラジョージは千八百〇七年起つて土耳其に抗して反旗を擧げ國内統一の功を奏したる者なれば正しく新セルビヤの元勳と云ふを得べきも同十五年

ミロシユ、オブレノウヰチなる者出で自國民を率ゐて土耳其軍に抗し其功を以て國人はミロシユを公に封じ同三十年に至り土耳其之を承認し所謂オブレノウヰチ家の第一世となりしも同三十九年位を其子ミランに讓り、ミラン位に即きて忽ち夭折し其弟ミカエル公位に即きしも同四十二年當時の國民大會はオブレノウヰチ家の王權を奪ひミカエルを廢し、前述カラジヨージの子アレキサンダー、カラジヨージウヰチを擁立したり、然るに同五十八年に至り同一の國民大會はアレキサンダーを廢して前の公ミロシユを復位せしめミロシユは翌々年位をミカエルに讓りミカエル再び公位に上るを得しも同六十八年カラジヨージ黨の弑する所となり、其甥ミラン權ぎ土耳其と戰ひを宣し露の後援に依りて獨立國となり同八十二年遂にミラン一世の名の下に王號を稱するに至りたるも同八十五年ブルガリヤと戰ふて敗れ幸ひ墺匈國の强援に依り滅亡を免れしも輿望日に落ちて同八十九年廢位

せられ、其子アレキサンダー一世立ち千九百年ドラガと婚したるが在位十三年結婚後三年春秋僅に二十七にして愛妃と共に兇手に斃る、是に於て國民大會は廢公アンキサンダー、カラジヨージウヰチの子ピーターを喚返して王位に即かしむ、現王ピーター一世即ち是なり、國人の其主を更ふる奕棋の如く何ぞ其れ容易なる、而して曰く前王は子なかりしと、二十七の青年にして結婚後三年を過ぎざるに子なしとて斥くるを得るか、ドラガが不德なりとて王妃併せて之を弑するに至りては沙汰の限りなり、彼等は跨大狂病に陷れるの民たるなり、歴代君主の終りを全ふせざる多くは國民の滿足を買ひ得ざるに基づく、幸にして現王久しく遺客として辛酸を嘗め能く民の利病の在る所、時代思潮の赴く所を看識せられ年既に六十七、齢なるも猶健に、加ふるに二王子長王ジヨージは二十三歳皇太子たりしも一昨年ボズニヤ合併當時墺匈國に

對する主戰論の隊長たりしが爲め國際平和の犧牲となり太子の位を其弟アレキサンダー(二十一歳)に讓られたり目下病中の太子は即ちジョーヨの弟たるなり)の存するあり後嗣の憂ふべきなく、早く妃(即ちモンテネグロ國王の女を娶はれたるも獨居して浮名を流されたることなく、一昨年名實共に全然獨立不羈の王國たることを中外に宣せられて興望特に高きものあり、加ふるに時勢の推移を以てす、將來に於て萬不祥の事なかるべきは人の信ぜんと欲する所なり、博物館に入りてゾサメの大額を仰ぎ街頭に出でゝ舊王宮の芝生と化せるを目擊し此國人の時大思想に想到して一言之に及ぶ。

セルビヤの議會

十一月二十七日は日曜なりしに拘はらず墺匈國との通商條約に關する重要議案あり午前中は開會すとの事に議會(スクプチカと呼ぶ)に赴き則を通じて傍聽を求めしに本議事はなくて委員會あり二三大臣も之に列席して評議中なりし、書記官に案内せられ場内を一巡す、小規模の假議事堂にして今や巨費を投じて新に建築中なるが如し、此國は十九世紀初建國以來頗るの民主政治にして歴代の國君が國民の意思に依りて進止せしは史跡の證する所、一旦大事件あらば國民大會を召集して之を決定す、故に今のスクプチカは毎年定期に開く國會なるもスクプチカなる語は國民大會に附したる名稱にして建國以來時に之を開きて大事を衆議に諮りたるものと云ふべし。

セルビヤの建國斯の如きを以てブルガリヤ及モンテネグロと同樣、國に一名の貴族なく、一院制にして政府黨の首領が則ち議長にして内閣總理たり議員の數百六十人之を黨派別とせば。

△政府黨　百三十四人内舊ラジカル九十、新ラジカル四十四、

△反對黨　二十六人内進歩黨七、國民黨十八、社會黨一、

現内閣は一昨年秋ボスニヤ合併事件の當時に成立せしものにして總理大臣にして國會議長たる男(其名を逸す)は舊ラジカル黨の首領なり政府黨の優勢想ふ可し、總理にも數分間の會見を遂げたるが墺匈國通商條約案も略原案通り決定する模樣なりと語れり、傍に速記長あり、此國の新案に成るセルビヤ語の速記なりとて誇示せしも余に讀める筈もなし、前王妃を弑せし士官逃は如何せしやと聞くに國會は之を罪せず、然し列國の手前もあり八人皆恩給を得て現職を退き平穏に餘年を送りつゝありと、議場に入り議長席背後に在りしアレキサンダーの肖像撤せられ現王の凜々しき姿の懸けられて議席を俯瞰せるに氣附く、昨年の歳計は歳入一億三百六十四萬四千餘法、歳出一億三百三十二萬三千餘法、面積四萬八千三百平方吉米突、人口二百七十三萬(一九〇六年の調査)の小國にしては相當の重負擔と云ふべし。

國中の富

國中山岳多きことボスニヤに彷彿し、地中の石炭、鑛物等未發の富多く地上の森林に至りては全面積の二割五分を占め山毛欅を主とし楡、楓之に次ぎ、果物亦國の重要産物なり、森林の約三分の二は國有に屬し既に之が伐採の特許を與へたる所少からず、セルビヤ東部の河川には多量の砂金を産すと云へるが猶仔細に地中の富源を探査せば更に意外の掘出物を得べしとなり、此國は多瑙(ダニユーブ)の大江に瀕するを以て瑞西と合せて歐洲に於ける唯二個の海岸線なき邦國なるも能く貨物を中央市場に運ぶべく、現に國内の首要都市を聯結せる鐵道成り道路亦漸次普及せるも交通機關は更に一層の發達を要す、此國政治家固より茲に目を着け昨年末獨佛二國にて募集せし一億五千萬法の公債は重に鐵道其他の交通機關に投資せらるゝ筈なり、ボスニヤ合併事件に依り此國

の隣邦墺匈に對する惡感は其高潮に達し前太子の主戰論を提唱せしは勿論闘國殺氣滿ち其國境に兵を集め甚だしきはボスニヤの境を越へてビツユグラット方面迄も出沒せしは前日サラユボより通信せしと記憶す、斯くて兩國間の通商條約は改訂の時機に際せるもセルビヤ人は敵愾の餘之が改訂談判を開かんとせず、盛んに墺匈國品排斥を企て相對峙すること二年に及びたり、セルビヤの大得意は勿論墺匈にして輸出の三割は後者に向ふものなるが此等の關係に依り最近兩年は通商上自己も墺匈と共に大打撃を受けたるは是非もなし、今一昨年と昨年とに於けるセルビヤより外國への輸出を見るに一昨年の總額七千七百七十五萬法、中二千百五十萬法は墺匈國へ昨年の總額九千二百九十八萬法中二千九百十萬法は墺匈國へ輸出せしものにして猶第一位を占む、獨逸が各方面に巨手を伸ばして商權の掌握に腐心せるは言はずもがな、輓近此國に向つても諸種の機關を設けて貿易の助長に力め墺匈國と反目の機を利して更に一倍の活動を爲し獨逸との貿易は既に土耳其と相伯仲して第二位を占む、即ち一昨年は獨逸への輸出千四百萬法(土耳其は千九十七萬法)昨年は千五百六十萬法土耳其へは二千二百萬法)に及び之に墺土兩國を經て獨逸へ輸出せられしもの昨年度に於て約千萬法に上りしと云へば昨年度に於けるセルビヤ海外輸出の二千五百六十萬即ち約二割七分は獨逸に向ひし勘定なり、而もセルビヤの排墺熱も時の進むと共に漸く醒めて平調に復し近く條約の改訂を見るべく、前述せる新公債の沿用は此國の富源開拓と武力充實とに充當せられんとす、要するに地上地中の富は頗る莫大にして未來の發展に待つものあり、加ふるに巨額の國有財源を有するに於て立國の要素既に備はるを以て大セルビヤの理想を實現するに足らずとするも優に體面を維持し巴幹の一角に鎮座するに足らん。

愉快ならざるベルグラットの二日

ベルグラットに在る二日、入市の際に於ける風雪は聊か快なりしも午後に入りて雨となり翌日に至つて猶霽れず、愉快なりと云ふべからず、道路の石を敷詰めたるが修繕を加へざる爲め凹凸甚だしく雪後の泥濘歩行に堪へず加ふるに馬車の不潔なるモンテネグロ以上なり、愉快なりと云ふべからず、ホテルはベルグラット第一と云ふも何となく不親切の風あり、食堂若くは珈琲室に蝟集するの客種は此市社交の中心たるべき人士なるも軍裝士官廻の骨牌を弄するもの多く而して殆んど婦人客を見ざる、愉快なりと云ふべからず、此れ猶可なり、此國の人と會し前王妃弑害の事を聞くに雖しも當然となせるものゝ如きに至つては理の當否は暫く措き從來の史跡に對蹠して一種不愉快の念を禁ずる能はざるものありたり、余戯れに一代議士に向つて曰く、國會が萬能にして國君を更ふる裘を更ふるが如くにして猶且之を戴くは何の理由ぞ、國君一旦廢せらる何ぞ相議して共和の制を立てざると、彼れ曰く否々國君は大に必要なり、國君は一國の統一に必要なり、大セルビヤ理想の實現に必要なり、吾等の同胞はボスニヤにもモンテネグロにもマセドニヤにも巴幹の各地に散在す、此等は異日我國君の一麾下に集るべきものと、果然彼も亦跨大狂の一人なりしなり、不愉快なりしとは敢言せざるも少くも愉快の感なかりしは此市の二日なりき。

愉快ならざるのベルグラット去るに如かずと考へ二十七日夜十一時十五分發ソフヰヤ行二等寢臺車中の客となる、四人の定員に四人の客滿ち一名の猶太人らしきもの盛に自利自我を發揮し人をして嘔吐を催さしむ、彼れ翌朝未明ニシュに下車し同乘の客相顧みて嬉色あり。

何んと云ふも未だ巴幹

ニシユはセルビヤ第二の都會人口二萬二千、南部セルビヤの商業上の中心なるも軍事上よりするも南マセドニヤを控へ東ブルガリヤを制するを得て最も樞要の地なり、故に歴代必爭の地たりしとベルグラットの如く千三百七十五年此地の沒落はやがてセルビヤ滅亡の動機となり或は伺牙利の手に歸し或は墺太利に略せられ、後土耳其の有となり以てセルビヤ復興の時に及びしもの、此地より南下せばサロニカに直通し得べし、ニシユよりピロットに至るの間は所謂ニシヤワの峽として全線中絶勝の地と聞きしも暮中に過ぎ、九時ブルガリヤの境に入りツアリブロット驛にて手荷物の檢査あり、ブルガリヤの稅關吏は平服にして丁寧、他のスラブ諸邦に比して如何にも床しく覺ゆ、然も旅券調べは此處にも行はれ巡査の外兵士らしきもの二組我室に來りて旅券を一見せんことを求む、余は既に巡査に示したる後なりしかば一喝之を斥けたるに默揖して去りたるは笑ふ可し、其初め難也納に在るや

先づブルガリヤ領事館に就き旅券査證の必要あるや否やを問ひしに四五年前より査證を廢し往來自由となしたりと云ひ、又セルビヤ領事館に於ても然か答へしを以て先年巡遊の際に比し流石は進歩したりと心窃かに兩國官憲の新文明に觸れつゝあるを喜びたる次第なるに、前にセムリンにてセルビヤ巡査の旅券を取調ぶるありベルグラット停車場にても再び余を呼止め旅券を檢し旅行先宿泊のホテル等を手記するに會し今又ブルガリヤに入りても同樣の手續を爲す、唯だ旅券に査證を要せずと云ふのみにして入國の煩は依然たり、佛領北部亞非利加に於てもモロッコに於てもモンテネグロに於ても、余は未だ曾て旅行券調べを受けたることなきに巴幹に至つて初めて此煩あり、何と云ふも未だ巴幹は巴幹なり。

ツアリブロットを過ぎて中央歐羅巴標準時より東歐羅巴標準時となり一時間を進ましむ、是より地勢漸く高くドラゴマン驛に至り海拔二

千四百尺に達す、維也納、コンスタンチノープル全線に於ける第二の高處(第一の高處はフアカレル驛なり、千八百八十五年十一月セルビヤ軍ブルガリヤ兵を此に破りたるもスリブニッサの戰に於て大敗したるは史を讀むものゝ目に熟する所、火車戰跡を貫通し遙に記念碑を雪中に望みカメラを取出して撮影を試み當年を追回して空想に耽りつゝある間に首都ソフヰヤに着く、時正に後一時定刻に後るゝ一時間餘。

ソフヰヤのグランド、ホテル

ソフヰヤは、明治三十六年六月曾遊の地なるも停車場附近家屋新に櫛比し當年を忍ぶべくもあらず、幅廣く街衢井然たる大道を疾馳して王宮前の舊知グランド、ホテルに投ず、帳場の者に余を記憶せりやと問へば其然るや否やは知らざるも直に然り記憶せりと愛想能く答へて余を階上の一室に案内し又食堂に導きて慇懃に用命を待つ所、ベルグラットの冷かなりしに似ず入都先づ快感あり、セルビヤは陰氣なるもブルガリヤは陽氣なり、巴幹の新日本を以て任じ最も未來あり活氣あるの國何となく愛すべく喜ぶべきを覺ゆ。

食後腦げに腦裡に存する記憶を辿りて街頭に出で王宮々上の王族を仰ぎ公園を經て各省の建築物、大劇場、博物館に出入し又大街を散策して民俗を探るに、駸々の氣風市中に滿ち大建築の彼處此處に聳ゆるあり往來の客に流行を趁ふの服裝多く全然中歐都會化しつゝあり、人口は之云ふに七年前に六萬内外に過ぎざりしもの今は九萬に垂んとすと云ふ、ベルグラットの八萬二千に比して既に之を越ゆ、而も今のソフヰヤが僅に三十年の新都たるに想到せば以て兩者膨脹の差甚だしきを見るべからずや。

三十年の新都

ソフヰヤは由來要衝の地其古に溯れば羅馬のトラヤン帝既に此地の形勝を認めオーレリアン帝の時には此地を新領州ダシア、メジテラニヤの首府としコンスタンチン大帝も『モルディカ(即ちソフヰヤ)は余の羅馬なり』と激稱したる位にて羅馬時代の城壁の跡猶存し、後ブルガリヤ公の首都となり土耳其時代にも巴幹半島總督の所在地として知られ居たるも、實際上今のソフヰヤは千八百七十八年一月露軍の此地侵入を以て起點とすべく、即ち三十年の新都たり。

當時の人口は二萬一千に滿たず約五千の土耳其人は多く境を越へて本國に遁れ去り市中の建物兵火に罹り見る影もなく破壞せられしも、翌七十九年バッテンブルグのアレキサンダー公選ばれて新ブルガリヤ國公となり此地に王宮を築きしより漸次に發展し昔時狹隘不潔なりし猶太人、チゴイナー及土耳其人區域も一掃せられて新家屋之に代り、主なる街路は切石又は煉瓦を敷詰めアスハルトの所もあり電車電燈水道の類市を飾る、試みに市の四圍を散策すれば道路四通して將來を設計し大建築處々に點在し日に月に膨脹しつゝあり、七年間に長足の進歩をなしたるを覺へしめたり。

ソフヰヤ政界の今昔

七年前曾遊の當時は恰も東に於ては滿洲問題日露の國交を破らんとし西に於てはマセドニヤ問題の餘波延てブルガリヤ、土耳其の兩國將に兵戈相見へんとし危機一髪に迫りて露國の勃、土衝突を喜ばざるあり、親土主義なりし故スタンボロフの後繼者なるペトコフ新にダヂフ内閣に代り戰雲を披かんとしつゝある際にして、歩して街頭に出で公園附近を逍遙するにマセドニヤより難を避けて此地に入るもの數千を算へ、親を失ひたるの子、子を失ひたるの親、最愛の夫を亡ひたるの妻、其一族各喪章を肩に着け、食ふに糧なく寢るに家なくして彼處此處の

榕下に臥し五六小童のマセドニヤ騷擾事件の號外を手にして絶叫しつゝ袂を掠めて過ぐるあり、其號外を求め相集まりて故郷の慘事に客中の身を傷ましむるの風情余をして同情に堪へざらしめたるに、今や此問題も一先づ落着して當年の避難者も各其所に安んじ、國は一昨年の宣言に依りて名實共に獨立王國となりフエルヂナンド王の輿望愈々高く國力增進し九師團の强兵を擁して巴幹に雄視するを見る。

然も當年のペトコフ今如何の狀ぞと聞くに彼は當時より一昨々年に至る約五年間國政を司どりしが千九百七年マセドニヤ人の爲め街頭に要擊せられて非命の死を遂げ、マセドニヤ協會委員長としてマセドニヤの野に轉戰し大ブルガリヤ理想實現の爲めに奮鬪しつゝありたるボーリス、サラホフも其翌年矢張りマセドニヤ人に殺され、ペトコフの後には同黨のグヂフなる者一時總理となりたるも、一昨年に至りヂモクラット黨の首領マリノフ宰相となり國會即ちソプランエに於て議員を有する百七十絶對大多數を占め、反對黨としては農民黨の二十四名を主としゲシヨフの率ゐる保守黨四名あるのみ、スタンボロフ黨に至りてはゲナデヤエフの之を率ゐるあるも殆んど議場に其跡を絶ち前々宰相ダチフ派も僅に三名を存す、現政府黨はセルビヤの現政府黨に比して更に優勢なるが如し、變遷も亦甚だしからずや。

忘れもせぬ七年前余のソフヤに入るや先づ第一に車を驅つて故スタンボロフの墓に郊外に展し、香花を捧げて未死の魂を弔す、偶々墓邊に芳草の花咲けるあり、其二三枝を手折り返つてホテルの食堂に入り側の國人に向つてス公の事を賞せしに彼等は衷心の喜びを顏面に滿へ東方遊子の同情に感謝せる模樣ありたり、スタンボロフが巴幹の英雄として新ブルガリヤ建國以後の第一人たるは今も猶國人の認識する所、而も其後繼者ペトコフも彼と同じく兇刃に斃れ其黨影を政界に潛む豈に多少の感なからんや、余はソプランエの開會中なりと云ふに

之を傍聽せんとて議事堂前のアレキサンダー二世銅像の前に佇立して開會時刻を待ちつゝありしに、二名の壯年余に一揖し余等は獨逸ハーレ大學に在りしもの君は日本の方と覺ゆ、何なりと用あらば、便利を計らんとてイト親切げなり、依つて諸種の質問を發し最後に政況を聞くに矢張りスタンボロフは此國の第一人なりしと云ひヘトコフも鐵腕家なりしが今の首相は意思弱しと嘲けれり、八方美人の多くは生命長く鐵腕の人往々にして夭折する東西同一嘆か。

國會

午後三時開會と聞き刺を通じて傍聽を求む書記官某に導かれ傍聽席に入らんとしつゝある際、軍幹長大の堂々たる一紳士歩み來りて余の欲する所を問ふ、言葉の能く通ずるに是れ幸と、其云ふが儘に伴れて議場に入り階下の新聞記者席(傍聽席は階上に在り)に混入す、彼は御用新聞プレボレッ記者にてサンフと云ふ獨逸歸りの漢なり、丁寧に且低聲に政界の狀況、黨派の區別、議題等を説明す、七名のマホメダン議員(赤帽を戴けるを以て直に認め得ることポスニヤ議會と同樣なり)あり、何れに屬するぞと問へば彼等に主義なく定見なく常に政府黨たり故に現在にてはデモクラットに屬すとて一笑せり。

此日副議長代つて議長席に着き大臣席には藏相の坐せるあるのみ、約二十分にして閉會す、何故に然く短時間にて閉會するぞと聞くに彼れ曰く本日はスリプニッサ戰勝の第二十五年記念日に當るを以て休會するなりと、スリプニッサの戰にてセルビヤを敗り東ルーメリヤを合するを得たるは前に述べし所。

ブルガリヤの憲法は露土戰爭の後、臨時政府に執政長官たりし露の將軍ドンドコフ、コルサコフの下に露のグラドフスキー博士の立案せし所、大體の方針は固より伯林會議に於て決定せられたる條項に從つて

國法上の地位を定めたるもセルビヤの前例に倣ひ白耳義憲法を模したる所多きは其條文を一讀する者の想像に難からざる所、原案は憲法會議に於て多少の改訂あり、千八百七十九年四月に至り會議の議了を經、議員並に土耳其委員、關係列强代表者の關印を以て發布せられたるが、千八百八十一年のクーデターの結果一時中止したるも其翌々年恢復せられ以て今日に及べり。

ソブランエの議員は人口二萬人に一名の代表者を選出するの割合にて五年を一期とし三十歳以上の男子は被選權を有し議員の權限は相當に廣きも要するに各國と大同小異なり、然るに茲に他國に類似セルビヤを除くなき大ソブランエなるもの規定せらる、即ち大國民大會とも云ふべく其會議に列席する議員の選擧方法は定期國會のソブランエと同じきも其數を倍加し一萬人に一名の代表者を出し、左の條項の一を決定するの必要ある場合に臨時之を召集す、

第一、王國の領土を他と交換若くは他に讓與するの問題起りたる時。

第二、憲法の改正を要する場合。

第三、王家の後繼絶へ新王の冊立を要する場合。

第四、國王幼冲にして攝政を設くる必要ある場合。

第五、國王をして政體の變化を爲さしむる場合。

是れに由つて之を觀れば大ソブランエの權限絶大にしてセルビヤの國民大會が國命を左右し來りたると大差なきを見る。

大臣の重責

既に斯る場合を豫想して憲法に明記せる以上勢ひ執政官たる大臣にも臨機の特權を附與せざるべからず、即ち大臣は其連帶責任として通常政務の外左の場合に於て憲法の命ずる所に從ひ國政を料理するも

のとす。

第一、國王の去り若くは崩じて儲子なき場合、大臣會議は絶對行政權を行使し新王冊立の爲め一箇月以内に大國民大會を召集すること。

第二、王若し攝政を設くるに暇なくして崩御せられたる時は、大臣會議は前同樣の統治權を有す、而して攝政を設くる爲め一箇月以内に大會を召集すること。

勃加利の誇と書店

ブルガリヤ人の跨りとして外人に示す所は教育の普及せること是なり、抑壓に苦しめられたる四百年のサルタン治下時代に在りても宗教學校を到る處に設立して國民教育に腐心し、其結果一條の生氣を同胞間に繫ぎ得、以て今日の獨立を見るに至りたるものにして昔時の寺小

屋式教育が獨立を生むの母たりしことは外人も唱へ又彼等自らの信ずる所、故に盛に教育を奬勵し千九百三年乃至四年に至る七年前の統計に依るも當時の學齢兒童五十五萬四千五百六十八人の中三十四萬六百六十八人は就學し即ち約六割一歩四厘の男女平均就學比例を見、男子のみを以てせば二十二萬六百二十人、即ち約七割八分九厘の就學を見る、思ふに最近統計の據るべきものなきも就學强制の結果今日には著るしく上りて九割以上に在るべしとは一物識の語る所なり、同年に於ける教育費の豫算は七百六十二萬五千六百法にして多數の私立學校、宗教學校の外、官設に係るもの幼稚園四十、小學校四千三百四十四、中學校十、高等女學校八、大學校一あり、此外に技藝學校、盲唖學校、商業學校等の設備もあり、教育博物館、教育圖書館、實驗場等の外に各村落を通じて約一千の圖書館あり、以て農民智識の向上に努力する等進歩の跡著大なるものあり、此點に於て土耳其領は固より巴幹列邦の上に嶝

然頭角を顯せるは快心の事實にして此國新興の機運熾なるの動機此に在り、國人の誇りとするも左る事ながら、首都の街上に書店を物色し其第一店と云ふものに就て見るも教科用書類の外、一般政治經濟の狀況を知悉するに足るべきものに至りては寔に寥々、書店の有する書籍の分量も其外形に依りて想像し得べく三四箇所を訪ひたるも何れも書物專門のものなく皆他の雜品と混賣しつゝあるを見る、外國語書籍の如きは殆んど目に觸れず、聞けば注文ある場合には其本國より取寄するも平生其準備なしと、以て中流以上の社會に讀書力の乏しきを思はしむ、コハ管にブルガリヤのみならずセルビヤ、ボスニヤ固より然り、モンテネグロの首都には一軒の書店すらなき有樣なるを以て巴幹列邦に於ける智識の程度を卜するに足るも、教育を以て誇りとせる此國の首都に數軒の淋しき書店を算ふるのみなるは余の意外とせし所、案内の巨漢サソフ云ふ、我國人は多く露語を解し露書を讀む彼處に露西亞の書店ありと、往て之を見るに成程露人の店にて露語の書籍多し、乃ち知る露國的感化の深きを。

露西亞は叔父サン

言ふ迄もなく巴幹には南スラブ族多數を占む、モンテネグロ然り、セルビヤ然り、ブルガリヤ然り、マセドニヤ然り、否管に巴幹のみならんやボスニヤも、ベーメンも、クロアチヤも、スラボニヤも、ダルマチヤも墺匈國の大部分もスラブ族なり露西亞の親類筋なり、彼等は宗教を同ふし文字を同ふし多少の相異あるも人種を同ふし露西亞を母國視し、暦も亦露と同樣陽暦に後るゝ十有三日、露西亞的趣味スラブ的感化は墺匈國より南するに從つて漸く濃く目立ちて見ゆ、特に巴幹三邦に至りては其相貌の相似たるのみならず兵士の服裝も殆んど露國式其儘にして露を盟主と仰けるの樣事々物々に顯はるゝに露の後援なかりせば三

邦は今日の獨立を得ざりしや必せり、余ベルグラットにて一代議士と會し露國に對する感想を聞く、曰く露西亞は自由の恩人なりと、余云ふ、貴邦王を更ふる奕棋の如く獨立の實亦露に負ふ所大、貴邦の民露と同系同文なり如かず何んぞ合して大露の一部たらざると、彼乃ち大セルビヤ思想を發揮し手を掉つて曰く、否な否な露は我が叔父なり國猶幼なるや叔父の世話を受けたるも叔父は叔父なり、相續權は幼兒に存せざるべからず、余は叔父を敬慕し叔父の慈愛に親しむも叔父の家に同居するを好まずと、モンテネグロが公國より王國と露の補助を享け山中に立籠るもの亦露を叔父とせるや明かなり、若し夫れブルガリヤに至りては三十二年前露の兵力を藉りて土耳其と戰ひ僅かに蘇生したるものと云ふべく、ソブランエ前の廣場に新に成りし露帝アレキサンダー二世馬上の銅像、高さ約二十二尺脚下にニコラス太公、イグナチーフ、グルコウ、スコベレフ四將の附屬銅像あり、大書して『救主亞歷山二世帝』と刻せり、余は此像下に佇立し傍の一壯漢に貴國には之に代ふるの救主なかりしか、少くも四將の選に入るの人物なかりしかと戲れ問ふに、彼れ平然として答ふ、當時一切露の强援に依りしもの我に一將の以て此處に列せしむべき者を見出す能はざりしは遺憾ながら事實なりと、國立博物館に入り先づ注目を惹くはプレブナ戰勝記念碑の模型にして中央にアレキサンダー二世あり左右にイグナチーフとスコベレフを見る、ソブランエ前の銅像とプレブナの記念碑は明かに建國の歷史を語り叔父さんの恩顧多大なるを思はしむ、而も誰か知らん彼等の祖先はスラブ族に非ずしてフヰンノ、ウグリック族にして我等に近き人種なるを、此フヰンノ、ウグリック族は七世紀頃ウオルガ地方の故郷を棄て露西亞を横ぎりて多腦河畔に移住しブルガー即ちボルガーと稱せられてウオルガ河畔の民たりし名殘を存す、唯だスラブの盛化力大なりし爲め彼等は漸次スラブの言語を用ひスラブの習慣に化せ

らるゝに至り永年の間に雜婚して古のブルガリヤ王國を建設したるもの、斯くして第九世紀の末には基督教に歸依しボーリスなる時ブルガリヤ王となり、次でシリルなる高僧出でゝ所謂シルリック、アルハベットを發明し、此文字今や全スラブ民族(露國も固より)の用ふる所たり、彼等は自らスラブ化せられたるのみならず其スラブ文明に寄與する所甚だ大なるものありしは此一邦之を示して餘りあり、而して其昔のフヰンノ族たるを知るもの果して幾何ぞ。

マホメダンの少き所以

モンテネグロの總人口二十七萬に過ぎず云ふに足らずとして、ボスニヤ、ヘルセゴヴヰナの人口百八十萬其三分の一はマホメダンなり、然るにセルビヤの人口二百七十三萬(千九百六年調査)内マホメダンの土耳其人は三千に過ぎず、ブルガリヤの人口四百萬(千九百五年調査)内土耳其人四十九萬八千、之をセルビヤに比せば多數なるも猶全人口の一割強にして三百二十萬のブルガリヤ人に當るに足らず、何故に然るやと云ふに此等二邦に於ては從來の土地所有者は即ち農民にして四百年間土耳其の治下に在り、土耳其人が治者としてこれに臨み多少の地主となり優者となりし者ありしも、獨立思想の勃興に從ふて少數治者の民は難を避けて永住の計を爲さず、愈々獨立を宣するにいたりては首要都市に散在せし土人多く本國に去り農民と混住せしものも其土地を賣つて境外に去るもの多く、土國政府亦此趨勢を助けたれば兩國に於けるマホメダンと云へば則ち土耳其人なり、而して治者たりし土耳其人が土地を兼有するに及ばずして立退きしもの、農民が土地所有者たりし過去の歴史に依ること勿論なるも彼等がマホメダンに化せられざりしこそ今日マホメダンの少數なる所以、マホメダンの少數なるは則ち農民問題のなき所以、塞物兩國の中堅は實に農民に在り、國に貴

族なく富豪乏しきは農民をして益々力を得せしむる所以、議員の大多數は實に農民たるなり、ボスニヤの場合は則ち然らずボスニヤ今日のマホメダンは土耳其人に非ずしてスラブ人なり、四百年サルタンの治政の間にマホメダンに改宗せしものゝ子孫なり、斯て彼等は治者として農民に臨み特權を有し土地を兼併す、ボスニヤに於ける土豪の大部分がマホメダンにして農民問題の最大難件たるは前便既述せる如し、彼等は人種、言語を同ふし、唯宗教を異にするのみ、加ふるにサルタンの治下に在ること永く、名實共に基督教國たる墺匈に合併せられしは事一昨年に屬し、彼等が勢力を其土に扶植し得たる到底兩國の比に非ざることを察すべし、此點に於て兩國の統一や頗る便利なるも新領州を得たる墺匈國の苦心はマホメダンの多き點に至らん、況んやボスニヤのマホメダンは土耳其に比し一層迷信的なるをや、是に於て乎益々新領州の治め難きを思はずんばあらず。

大藏大臣と語る

國會を見物し、書店を素見し、プレボレッ社を訪ふに日漸く暮る、乃ち巨渋に別れ約を履んで午後六時大臣リアプチエフを大藏省に見る、彼れ頗るの快男子にして能く談じ七八年前此地に來遊せし渡邊子爵(國武氏)を知れりと彼は當時アドボカートたりしもの、政界の變遷より農民問題に及びセルビヤは百姓の天國なりと笑へり、蓋し同國には農民のみにして商賈に拙なるを嘲けりしものならん、而もブルガリヤも亦農民の國たるなり、彼が贈りし書三冊ブルガリヤ豫算案、ブルガリヤ政府年報共に佛文にして余の解する所に非ざりしも、『今日のブルガリヤ』なる大冊子は英文にして農商務省の編纂に係り一昨々年倫敦アールスコートの博覽會に自國を紹介せん爲め刊行せし官版なり、素讀するに多少の手前味噌と思はるゝ節なきに非ざるも各方面に亘り統計と

數字とを一々列擧して國勢を公示せる所得難きの好著なり、曰くブルガリヤは農業國にして住民の幸福繁榮は殆んど全く收獲に依る、收獲の良否は以て此國の經濟狀態をトすべく、曾に農民團のみならず商工業社會にも直接の影響あり、外國貿易は斯くて收獲の多寡に比例し豐年の後には貿易增大し凶年には不振之に伴ふと、果然彼の云ふ所は必ずしもセルビヤのみに非ず自國を嘲けるの語たるなり、而も農業國たるは未來あるを意味す、未發の富源地中地上に無限なるを意味せざるに非ず、此國は國命の新なる丈け國力に於ても未來あり多望の國たるなり。

貿易と歳計

此國の貿易は千八百九十四年より千九百三年に亘る十箇年の統計に據るに最低一億三十二萬法にして最高一億八千九百九十萬法、穀物が輸出貿易のパロメーターたるは前述の如く、最低貿易の年には輸出二千七百十三萬にして最高貿易の年には七千四百二十一萬の多きに上れるを知る、幸にも最近數年間豐作相次ぎ財界非常の好況に向ひ從つて必要の歳出に應じ又公債償還基金に繰込むを得て財政も切りに擧固を加へたりとは藏相の言なり、ブルガリヤは此財界の好況に乘じ一千九百五年を以て稅法を改正し、新稅(酒料稅の如き)を起して歳入の增加を計り、千九百年に八千三百八十三萬法の豫算なりしもの千九百七年には一億二千百九十八萬法に上れるを見る、同年一月現在の公債は三億七千七百萬法なるも三千二百十九萬法を同年の歳出豫算に繰入れ漸くて年々償還の方法を講じつゝあり。

君士坦丁堡に向ふ

それより晩餐後チゴイナーの歌舞を觀、又活動寫眞を案見するに偶々

リンコーン暗殺の場を演じ高潔神の如き斯人にして斯變に逢ひし當時の實況目睹するが如く眞に傷心に堪へず續いてトルストイ田園散歩の景出づるに及んで拍手四方に起る、彼等南スラブの兒は叔父サンの國の巨人の長逝に同情するものか、ソフカヤニ在る一夜、明くれば二十九日旦に雪を踏んでスタンボロフの墓に謁し歸途騎兵の警中に演習せるを望みつゝ歸館、行李を修めて正午停車場に至り土耳其行の急行車に投ず。

ブダペストより君士坦丁堡に直行するもの毎日一回、一週三回のオリエンタル、エキスプレスを除けば之が一番の直行車なり、ベルグラッドよりソフカヤに至る間寢臺車の滿員を見しが此地より土耳其に入るものは歸途に檢疫の煩ある爲めか乘客頓に減じ寢臺車には僅に二名の女客ありしのみ、一人一室を占領して意大に安し、ハカレルに至りて全線の最高點(海拔四千四百八十呎)に達し積雪更に深かりしが東ルーメリヤの境に入りヒリポペルを經て漸く轉く土耳其に近づきて四望雪を見ず。

國境の夜半

東ルーメリヤも何時しか過ぎて夜半土耳其の域に入り檢疫の爲めとかにて下車す、七八個の松火にて僅に黑白を辨ずべし、待つ十數分にして他の列車に乘換へを爲し一名の土耳其紳士我室に入り來るあり、君府にては虎疫猶終熄せざる爲め國境にて車を換ふるものと知らる、夜半の乘換へ事甚だしく面倒ならざるも土耳其よりの還路にはブルガリヤ國境にて五日間の足留めを喰はさると言ふに至つては旅客の少き所以略推すべし、ムスタファ、パシヤ驛に至り土耳其の關吏俄入して手荷物の檢査と旅券調べとを爲せしも余の行李には手だも觸れず丁寧に一揖し去れり、六ヶ敷と思ひし土耳其が却て簡易にして灰殼振れ

る塞、勃兩國の馬鹿丁寧なりしは好箇のコンツラストにて人事多く此の如き歟。

延着は常事

アドリヤノープルも夢裡に越へ、夜來の疲勞に三十日の朝起床すれば身は既にエージアン海に沿ふて東行しつゝあり、サン、ステファノに隣土平和條約の當年を偲び在君外人の避暑地たるアクリコイを過ぎ、人家櫛比の間を衝きエーヂヤ、ソフヰヤ大伽藍を左に仰ぎつゝ九時半と云ふに君府はスタンブルの停車場に着す、定刻に後るゝ一時間と四十餘分、蠅の如く蟬の如く群々群り來る案内者及び宿引の雖彼に喝を加へつゝ旅券に檢印を爲さしめ宿泊先を警吏に告げ微雨泥濘の街を驅り金角灣を渡りペラ街の舊知ホテル、グロッケルの第百四號室に入る、ホテルは高臺に位し三層樓上より灣を眼底に收め遙に君府全市の一半を遠望し得るの絶勝を領す、余の再び此ホテルに投せし所以なり。

左るにても汽車の延着は巴幹鐵道に在つては常事と見へボスナ、ブロットより三たび車を換へてベルグラットに着せしは定刻に遲るゝ一時間、ベルグラットを十一時十五分に發すべき一日一回の直行車でさへ遲るゝ半時間餘にして初めて發し、ソフヰヤにてはホテルの者の延着は常例なるを以て發車時刻迫るも余を止めて室に控へしめ停車場に電話して延着の時間を問ひ、曰く一時間餘の延着なり故に定刻に一時間を後れて驛に向はれて可なりと、果して然り、斯くて君府には一時四十分餘の遲着をなしたり、余曩に米國を横ぎるや桑港にて東より來るの友を迎へ一時間餘を待たされたることあり、再び巴幹に入りて延着を、常例とするの火車に客となり不愉快甚だしかりし。

雨雪の一箇月

汽車の延着は巴幹の常事として更に一事の記すべきは旅行期の不可なりしと是れなり、維也納を去つてより茲に一箇月、トリエストより海に浮んで忽ちにして海風ボーラに遭ひ、カタロに上陸してシロッコ(驟雨)に遇ひ、モンテネグロの積雪は猶可なり、ボスニヤに入りては雪ならずば則ち雨、特に山中鐵道に依り土耳其國境に赴きし際の如き前日の珍らしき好天氣なりしに似ず非常の風雪にて四顧の快を奪ひ、サラエボより北するも雪又は雨、ベルグラットの大雪、ソフヰヤの嚴寒、カタロ上陸以來太抵沿道雪ならざるなく、ベルグラットよりソフヰヤを經て東ルーメリヤに至る間特に白雪滿地なるを見る、土耳其に入りては雪なきも降雨迎天、昨今兩三日値に青空を望み得、雨雪の一箇月間に旅客としての最惡時期たりしなり、且巴幹は南に偏し氣候猶暖かなるべしと思ひ冬衣の用意充分ならざりしに之は又案外の寒さなりし、後の巴幹遊を試むる人の爲めに茲に一言す、余の第一次遊は初夏の候にて極めて暑かりし爲め此悔に陷りしもの。

二萬四千哩の程

本邦を辭し西へ西へと志し十有八國の山川風物に親しみ七箇月振りに歐羅巴の東南端に立ち一衣帶水を隔てゝ亞細亞大陸を指顧の間に望み漸く日東の近きを覺ゆ、天涯に放浪して四海を家とするの身洲は則ち單位たるの概あり、亞米利加歐羅巴を經て亞非利加に渡り復歐羅巴に歸りて今や其一端に在り、亞細亞は我故郷たり、亞洲九億の生靈は皆我同胞たるの感あり、知らず亞洲を合同して一と爲すの時は果して何れの時ぞ、囊中の手記を檢し行程を通算するに此に至る正に二萬四千哩、而して地球の大半を迂廻し來る、地球も亦小なる哉、明日午後の便船にてアデンを經て埃及に直行すべく十四日朝には身は早やアレキサンドリヤ港に在らん。

馬兒干（バルカン）偶感

從新月沒馬兒干　紛々小邦事構難
須起英雄試合一　不然易得生民安

塞耳維首都城頭吟

此地曾飜新月旗　山川更主幾春秋
城頭遠望感何事　只見大江天際流

再遊の土耳其

十二月十一日希臘アテン港外にて

君士坦丁堡の十日間＝七年前の回顧＝七年後の今日＝青年土耳其黨の由來と其運動＝陳勝吳廣＝憲法の復活＝ヒルミ內閣＝昨年四月の暴動＝ハミッドの廢位と土耳其のクロンウエルの方針＝コーランの近世化＝元老セイド、パシャ＝アラビヤ議員＝外國人記者協會と土耳其新聞主筆＝ガラタ新橋橋畔の感＝ソフキヤ大禮拜堂下の感＝舟を金角灣に浮ぶ＝獨人の勢力と佛語の勢力＝獨人の志＝セラムリック＝土耳其の參宮鐵道

君士坦丁堡の十日間

土耳其の首都君士坦丁堡に在る十日間、一昨日后四時羅馬尼汽船會社

の定期船ダシャ號の客となり君府を發し昨后四時當アデン港外に着し、虎疫流行地より來りしの理由を以て滿二日間の停船を命せらる、蘆に桑港に於て一週間の禁錮を經驗せし余は復た此所に二日の停船に會す、而も海上の空氣は體に佳に氣候の溫暖なる我陽春四月の如く、眼前ピレー港を距てゝ古希臘大帝國首都の遺跡を望見しつゝ甲板上を漫歩する所、求めて得難き安息の好機會なり、余は此機に於て再遊の土耳其感の一端を述ぶるを得るを喜ぶ。

在君一旬の、前半は淫雨頻りに外出に不愉快なりしも、后半は意外の快晴にて首都の大觀を了し又新政府の大官を訪ひ新議會を見内外識者と會し多少の見聞を廣むるを得たり。

七年前の回顧

七年前の會遊を回顧すれば當時は東に於ては滿洲問題日露の國交を破らんとし、西に於てはマセドニヤ事件勃、土の關係を危からしめんとし列强の視線此二點に集中せるの際なりし、偶々携へ來りし手記を繙くに回顧の情禁ずべからざるものあり、其一節に云ふ。

歐洲政界の呼物は例の巴幹と滿洲の問題なるも、後者は事繁つて萬里の外洋に在り、西歐の新紙時に驚に對し諤々の論をなすものなきに非ざるも、多くは頗る冷淡にして之を窮追する極めて稀なり、一言以て之を掩へば滿洲は日露兩國の問題のみと云ふ口調なり、然れども前者に對しては則ち然らず、百年來歐洲の禍源として其一事一件悉く列國の張耳飛目に値するものあり、墺露兩國相協商して土廷に忠言し內政の改革を迫り、又一方ブルガリヤを聖肘してマセドニヤ人の暴動に加擔せしめず、徹頭徹尾巴幹の現狀維持に努めつゝあるも火の手は益々揚りて今や歐羅巴土耳其一帶の地は修羅の巷と化し、殺戮、陰謀、破壞あらゆる不秩序不穩の報は日に列國の視聽を驚動

せしめつゝあり、殊に目前サロニカに於けるダイナマイト事件の如き憂時の人を危惧せしめしこと幾何ぞ、以墺を始めとし、各國兵艦をサロニカに集め、土廷に聲援して暴徒を彈壓せんとするの威を示し、小亞細亞よりする土耳其兵の陸續として峽を渡り、マセドニヤ方面に繰込むもの夥しく、暴徒と土兵の衝突は隨處に起りつゝあり、列國特に利害關係最も密なる墺露二强は屢々公文を發し、拄げて『マセドニヤに於ける事態稍急なるが如きも決して從來の方針を廢するに至らしめず』と言ひ、土廷亦固より列强に移牒して撤定の實、日ならずして舉げ得べきを唱ふるも、勃、土開戰の風說到る處に起り、戰雲巴幹の分野を翳し勢の激する所如何の機より兩國兵戈を交ゆるに至るなきを保せず、今回の火事は燎原の大火となるが如きは先づ之れなからんと雖も、巴幹の禍因は到底除却せらるべきに非らず、今に及んで身親ら其火中に投じ實況を視察するは多少の興味なからず、明治三十六年五月十日莫斯哥にて記せしもの。

オデッサを發してより三十六時間、本日未明起樺甲板上に出づれば船は正にボスホラス海峽に入りつゝあり、兩岸砲臺を築きて露艦の出航を監せるが如きも其實なきは既に水雷艇通峽事件の模稜の中に葬り去られしに見ても知る可し、而も岬頭より進んで東方詩人の所謂『世界の母』なる君士坦丁堡に近づくに從ひ、古壘、漁家、別墅、宮殿兩岸の勝地を點綴し、光景雄大又幽邃、覺へず偉なる哉、斯の天然の威を起さしむ、前七時船錨を金角港外に投ず、乃ち小舟を僦ふて稅關波止場に上岸、五「ピアスター」の釣の下にて手荷物檢査の煩を避け、案內者の云ふが儘にペラ街ホテル、グロッケルに入る、獨逸人の定宿なり、食後外務省を訪ふて用務を辨じ、其よりスタンブルの博物館、古刹等を觀る、君府の人口一百餘萬、金角港を擁して高丘に據り、又海峽を隔てゝ歐亞兩大臣に跨り三大市區を爲し、形勢の雄、規模の大、固より世界

第一に居り、宇内第一等國の首都たるに耻ぢざるの地位に在るも、積弊積衰の土人は新月の旗黄塵に汚るゝに委せ、街衢の不潔恰かも支那町に似、痩狗群を成して歩行に堪へず、人をして久しく滞留する能はざらしむ(同五月十八日君士坦丁堡着當時に記せしもの)。

越へて半歳極東の風雲は遂に日露の交戰を餘儀なくせしめしも、勃土の關係は故スタンボロフの股肱たりしペトコフのペトロフと共にダネフ内閣に代りて國政を執りし爲め幸に兩國の戰雲を披き得たり、則ち披き得たりと雖も、マセドニヤは何處もでも土耳其革命の導火線たり、日本の露國に對する大捷は東邦諸國の覺醒を惹起し、波斯に印度に埃及に支那に國權確立國利恢復の聲到る處に喧しく、土耳其亦其例に洩れずマセドニヤ第三軍團を手足とせる青年土耳其黨は一昨年六月に至り先づレスナ、モナスチールの地方に千八百七十六年の憲法復活を宣言するあり、州の中心サロニカは實に新政の發源地たり而して土

耳其人の醒覺に驚き、病土耳其の健康恢復を喜ばざる列國が其成行を具瞻せる間に、同十月五日に至り突然墺匈國のボスニヤ、ヘルセゴヴキナ二州の合併を宣言し、相前後して勃加利の獨立を宣言するあり、半身不隨の病根たりし此等地方の放棄に結局國内の統一を容易ならしめたるオスマンリーの國は同十二月に於て國會をスタンブルに開き、昨年四月の反動ありしも現陸相マームド、セフケット、パシヤのマセドニヤ兵を提げ、疾馳首都に入りて反動黨を一掃するあり、新政の基礎を固めてより茲に一年有半、今や第三期國會の開會中にあり、マセドニヤはブルガリヤ人、セルビヤ人、希臘人等の必ず得んと欲するの地にして「ルーリング、レース」たるヤホメダンよりも非回教徒の多數を占むるの地たる以上、問題は依然他日の解決を待つ間題たるべきも、新政のマセドニヤ人に負ふ所多きは一奇と謂ふ可し、而して當時のマセドニヤ監督長官たりしヒルミ、パシヤは新政の翌年二月キヤミル、パシヤに代りて

グランド、ビジル(大宰相)となりしも、同年冬に至り今のハッキー、パシヤの之に代るあり、而して昨年四月の反動當時サロニカ第三軍團の司令官にしてマセドニヤ監督長官たりしマームド、セフケット、パシヤが土耳其のオリバー、クロンウエルとして新政の大黒柱としてハッキーと兩立し現政府の双璧たる亦一奇なり。

七年後の今日

七年の歳月之を國家の悠久に比すればげに一瞬時なるも流石に土耳其は醒覺したり、否な醒覺せんとしゝつあり、某々國大政治家が『病土耳は長く病床に在らしむるが可』と公言し、此方針を以て土耳其に臨みしものなきに非らざりしも、病人の本人は萬難を排して病床より起たんとしつゝあり、一昨年八年振りに支那の南北を一巡して其醒覺の機運に最深の敬意を拂ひたる余は、七年振りに此邦を訪ふて文青年黨の國家を背負ふて立てる勇氣に甚大の同情を表せざる能はず、有體に言へば青年土耳其黨は其實少數にして母國人にも外國人にも餘り人望なし、守舊に泥むは人情の常にして他人の爲す所を非議するは人間の弱點なり、青年黨が衆愚の上に立ち新政を敢行せんとす、守舊にして迷信的の同胞マホメダンの喜ぶ所とならず、土耳其の統一に何等の痛痒を感せざる否な其分裂に依り利する所あるべき國内の異人種が青年黨の統一的態度に慊たらず、冷笑的批評的眼光を以て異教徒たるマホメダンの爲す所を見る基督教諸國民の眞率なる同情を得難きは自然の數ならん、土耳其も千四百五十二年マホメット二世がエージヤ、ソフヰヤ尖塔の十字架を撤し代ふるに新月を以てするまでは亞細亞西端の一雄邦に過ぎず、十九世紀初に入りて南風競はず、羅馬尼、希臘、クロアチヤ先づ離れて、埃及、セルビヤ之に次で立ち、勃加利、東ルーメリヤを失ひ、高加索地方を失ひ、最近にボスニヤ、ヘルセゴヴヰナを喪ひたる土耳其

が歐羅巴の最後の領土を見棄て君府をも退き小亞細亞の故郷に立籠るは當然にして歴史の繰返すべき所なりと稱するの歐人多く、タンニンの主筆記者(現時言論界の有力者すら我邦は到底歐羅巴を去りて亞細亞の本國に引込むが最後の落なりと語れり、然れども廢邦を興し絶世を紹くは男兒の快心事、古來の英雄多く之に依りて不朽の名を垂れたり、何等利害の關係なき東邦の客も此國の醒覺し統一せられんとするを見ては一片の俠心愉快の感に堪へず、余は彼の現政治を排し嫉み陷れんとする者を叱喝せんと欲す。

君府は新政僅かに二年、新進の氣既に上下に滿つ、此國が憲法國となり國民が議會にて國事を討議するに至りしは更にも言はず、第一街上に於ける旅人の恐怖たりし犬族は非蹤を絶ち、大街を散歩するすら安全ならざりしもの新政の御蔭にて陋悲に入るも何等危險の虞れなく、前サルタン、アブヅル、ハミッドの迷信的嫌忌に依り百萬の帝都に一電氣

鐵道なく一電燈(自用のものを除く)會社なかりしもの遠からず新施設を見んとし、酒錢を提供せざれば配達せざりし郵便配夫の弊も滅じ、官衙には少壯の徒登用せられて外人に接する丁寧に、自動車にて馳るの大臣あり、ハイカラの徒街に旁午す、領事館若くは相當官衙の特別紹介に非ずば立入るを得ざりし禮拜堂は外人の出入を勝手にし、新議會は新王宮と共にボスホラス海峽に面して新政を代表し、新勝の兵艦前に横はりて國權を保障す、若し夫れハミッド三十二年施政の特産物たりし探偵政治は一掃せられ、國人自由に往來し、自由に論議し、自由に外人と交際し、自由に讀書し、自由に執筆して何等危惧なきに至りしに於て此國民の生氣を恢復せしめしこと幾何ぞ、七年前曾遊の際君府にて祕かに購ひし二三書籍をスミルナの關使に強奪せられたる余は、今回此國に關するあらゆる書籍を公然書店にて求め、ホテルの客室にて公然披見し、又之を論題として此國人と政治の得失を上下するを得るに至

りては余の最も愉快に感ぜし所にして、長き桎梏より脱せし此國民こそ同情に値するものなれ、然らば如何にして此に至りしか、其遠因も多く近因も多し、此等は茲に細叙するの時なしとして之が提唱者實行者たる青年土耳其黨に一言を加へて止まんとす。

青年土耳其黨の由來と其運動

土耳其改革の運動は千八百二十九年アドリヤノープル條約以來其萌芽を出だせしも未だ大勢を制するに至らず、同七十五年セルビヤ、モンテネグロ兩邦の土耳其に戰を宣するあり、當時の大宰相ミドハット、パシヤ勢の赴く所を察し、憲法の發布を主張せり、ミドハットは青年土耳其黨の仰いて以て創業の始祖とする所、同七十六年に公にせられし憲法は則ち彼の立案にして現に行はるゝものは之を復活し二三字句の修正を加へしものに過ぎず、同年五月アブヅルアジス廢せられ、其子ムーラート五世繼ぎしも僅に三ヶ月にして又廢せられて前サルタン、アブヅルハミッド二世之を繼ぐに及び、ミドハットを喜ばず之を追放し後ち名を弑逆に籍り之を殺せり、ミドハット死して憲政の芽は茲に絶たれ、所謂ハミッド政治は憲法の中止より進んで益々辛辣となり、全權を一身に掌握してサルタンとしてカリフとして無限の專制を布き、以て昨年の廢位に終れり、斯くて多少の新思想を有し、祖國の秕政を慨し、祖國の復興を思ふの士は多く國外に逃れ、巴里、ゼネバを中心としてオットマン共同進歩協會の名の下に同志を糾合し、巴里に於てはメチベレット、ゼネバに於てはハラルなる機關紙を發行し、ムーラード、ベイなるもの推されて首領となりしも不幸ハミッドの好餌に變心し、今の下院議長アーメド、リザ、ベイ之を繼ぐに至り、熱心なる彼の指導にて勢力漸く張り、千八百九十五年アルメニヤ人虐殺の當時も、同九十七年希土戰爭の際にも舊政を顚覆せんとの計畫を爲せしも反間せるムーラー

ドのハミッドに密告するあり、ハミッドの警戒厳を加へて事成らず、隠忍時機を待ちしが千九百二年初に至り、時勢の推移は彼等を駆つて大會を巴里に催さしむるに至り、土耳其、アラブ、希臘、猶太、アルバニヤ、アルメニヤ、チユルチス諸種族より成る四十七名の代表者一堂に會し、憲法の復活、國内に於ける各人種の同權等を決議し、第二次の會に於て更に帝國の領土維持並に統一の爲め改革を爲すの必要を提唱したり、此時には青年黨の現首領ハリル、ベー議長たり、而も土耳其の統一、領土の維持に甚しく痛痒を感せざるアルメニヤ人の列國に後援を依頼せんことを唱ふるあり、多少の異論を生じ、茲に一派の士は共同進歩協會總裁の地位に在りし皇族サバ、エド、チンを擁して憲法及地方分權期成同盟會なるものを設けたり、此れ今日のリベラル、ユニオン黨の前身とも云ふ可く、共同進歩協會を稱して青年土耳其黨と呼ぶ)の措置に隠然反對の態度を取り、昨年四月の反動にも守舊派に與せしを見る、而してアルメニヤ人は別にアルメニヤ革命協會を設立し、又ブルガリヤ人は大ブルガリヤ協會を組織したるが、此二者は前述の如く土耳其の統一を念とするものに非らず、否な寧ろブルガリヤ人はマセドニヤを本國に併せんとし、アルメニヤ人も之に比周せんとし、唯だハミッドの政府を顚覆するに於て各派の一致を見しのみ、中堅たる青年黨の苦心一方ならず、彼等は祖國を統一し、祖國を復興し、再び新月旗の威力を中外に宣揚せんとするに於て力めて他の派と歩調を一にするを期したるが、千九百五年に及びサロニカに本陣を有する同趣味の團體の起るあり、此團體は名を自由協會と命名したるが、兩協會は翌年春に合同することゝなり、本部をサロニカに置き、回天の基礎茲に成れり。

本協會は既に合同前よりマセドニヤの各村落に支部を設けたるが、ハミッドの密偵政略日に辛辣となり、協會の行動は絶體に秘密を要するを以て、フリー、マソン結社の例に倣ひ會員の入會手續より宣誓の式、會

の組織、會員相互の關係等に至る迄絶體に祕密結社の組織となしたり、巴里には三人より成る會議あり、サロニカには十人より成る會議ありしも、其委員は祕密投票にて選擧せられ、屢々人を更へて敵の視聽を避け、又六人を一組とし、組合員と雖も三人の外は其姓名すら互に知らず、斯くてマセドニヤに於ける會員一萬五千、土耳其全體に於て八萬を算するに至れり、組合相互の連絡には婦人を用ふること多く、婦人は祕密文書の往復其他の行動に意外の助力を爲したり、其初め會員はマホメダンに限りしも、後基督教徒も入會し得ることゝしたり。

新思想を軍隊に注入するの最大要件たるに氣附きたる此黨は、漸次土耳其全國の駐兵地に人を派して同志を糾合し第一に手に入れしは後日革命の中心となりし第三軍團なり、次にアドリヤノープルの第二軍團に及び、シリヤ、アナトリヤ等の軍團にも同志の數急速に增加し千九百七年十二月頃には實際第三軍團の全部は憲法黨に與みし、第二、第四兩軍團も亦同情を以て之を迎ふることを確め羽翼漸く成る。

同年末大會を巴里に開き、憲法の復活、現政治改革の外、從前會て公にせざりしサルタン、アブヅル、ハミッドの廢位をも決議して宣戰の第一火を放てり、此運動を看破したるサルタンの彈壓方針は自ら一層嚴ならざるを得ず、其股肱ナジム、ベーを始めとし、多數の密偵と警吏をマセドニヤ地方に派し、或は黄金を散じ、或は官位を賣りて之が軟化に力め、又重なる士官を捕縛しサロニカに訊問所を設けて檢査に着手したり。

陳勝吳廣

是に於て新土耳其の陳勝たるニアヂベーは年齢僅に三十、少佐の微官を以て一昨年七月五日部下二百の兵を率ゐ、マセドニヤはレスナに革命の旗を擧げ、其翌日千八百七十六年の憲法復活の宣言をモナスチール其他にて發布し、其勢直に遠近を風靡し、加ふるにサロニカ本部の指

揮宜しきを得るあり、越へて二日、モナスチール地方軍隊の總司令官にしてニアジの軍を一氣に粉碎せんとて出陣の途に在りたる大將セムシ、パシャが第三軍團一士官の爲め街頭にて殺さるゝあり、翌八日四十八名の青年黨士官のサロニカにて捕縛せられたるに對し、十日にはサルタンの密偵ハッキー、ベーなる者青年黨に殺され、密偵長のナジムも同十一日負傷す、サルタンの活動は青年黨の活動に比例して又中々に激しく、第三回の使節を派して彼黨を羅織せんとし、第一に目標となりしは新土耳其の吳廣たる少佐エンベル、ベイなり、彼はニアジが皇女を以て配とすべしとのサルタンの甘言に乘せられずして革命の第一旗をレスナ山上に立てし如く、サルタンの懲懲なる召喚を排し、同十三日免かれてニアジに黨し、革命の第二旗を立てたり、陳吳既に起つ、而して中央地方の歩武一致し、武力の之が用を爲すあり、勢ひ燎原の大火たらざるを得ず。

サルタンは反對黨緩和の一手段として曩に捕へたる四十八名の青年士官を放免せしも、其翌即ち同月二十二日機敏なるニアジは一千の兵を以て暗夜にモナスチールを包圍しセムシ、パシャの死に代つて派遣せられたる元帥オスマン、パシャを幕中に捕虜とし、之を優遇してオクリダの根據地に拉し、オスマンの名を以て左の電報をサルタンに致さしめたり。

臣は今や直に憲法を復活するに非らざれば君府に進んで闕下に要求すべきを誓へる軍隊の手中に陷り、而して臣も此軍隊の意見に與みして其首領たるを辭せず。

此日十萬のアルバニヤ人は又青年黨に與みしてウスクプよりサルタンに飛電し、憲法の復活を要求せり、セムシ既に死しオスマン又虜となりたり、首鼠兩端を持せし監督長官ヒルミ、パシャが青年黨に內通するに至りしは當然なり斯くてニアジ、エンベルの兩青年士官が陳吳の旗

は意外に早く全マセドニヤを席捲してイルヂスの宮中震駭す。

憲法の復活

同日大宰相フエリド、パシヤ(余の七年前來遊の時にも大宰相たりし人)辭し、セイド、パシヤ(現上院議長にして余は此人に會見せり)七度目に大宰相に任せらる、夜時局に就き大臣會議あり、徹宵評議せしも決せず、而も翌二十三日にはモナスチール知事の中央政府の指揮を待たずして人民歡呼の裡に憲法復活を宣言するあり、アナトリヤ兵のマセドニヤ運動に合體せしの報あり、形勢益々非にして同夜復た大臣會議を開き、憲法復活の可否を諮りたるがサルタンは恐怖して苦悶し、大臣は默して語らず、默して語らざるは默認を意味するものなりとのセイドの提言に依り、先づ憲法復活の決議に調印し、乘之に次ぎ、斯くて三十二年振りにミドハットの作りし憲法は再び此世に蘇りたるなり、廿八日サルタンは憲法に對する宣誓を爲し、宗教の長たるセーク、ウル、イスラムに勅語を下して『朕が臣民の幸福を計る爲め茲に憲法を布くを誓ふ、何人も朕の此舉を阻む能はず、全國民は今や共同進歩協會の會員なり』而して朕は其會頭なり』と宣ひ、同日セーク、ウル、イスラムはコーラン聖典に誓ひ『サルタンはコーランの手前に於て憲法を布くを宣し、必要の諸改革を爲すを誓はれたり、余は聖典に依りサルタンの證言の特記せられたることを茲に誓言す』と、此大典の復活を實現せしめし青年黨は是より之が實施に就き更に腐心を爲さゞるべからず、青年黨の勢力とサルタンの間に板挟みとなりたるセイド、パシヤ内閣は陸海軍大臣の任命、セーク、ウル、イスラムの辭表等の難問題に逢着し、成立以來十日を出でずして瓦解し、他の元老キヤミル、パシヤ八月六日に立つて宰相となり、新政の政綱を發布し、同十二月十七日、ソフヤヤ禮拜堂廣場前の假議事堂に於て第一回の國會を召集し、一先づ其目的を達し、新政の第一日に

入れり。

ヒルミ内閣

即ち新政の第一日に入れりと雖も青年黨の苦心は寧ろ此日より始まれり、彼等幸に風雲に乘じ所謂馬上にて天下を得たり、然れども馬上にて得たる天下は馬上にて治むる能はず、彼等は前述せる如く、ブルガリヤ人、セルビヤ人、希臘人、アルメニヤ人、猶太人等ハミッド政治顚覆迄の道伴れはありたるも、愈々責任の地位に立つに於ては大多數の愚昧にして守舊なる回教徒に對し地歩を占めざるべからず、大多數の彼等を教導せざるべからず、國内各人種の同樞を宣言せる手前には之を尊重せざるべからざると同時に、國家の統一を圖らざるべからず、斯くて青年黨は一身兩様の使分を爲すを要す、非常の根底と訓練なくば有終の成蹟を擧げ難きは想像に難からず、守舊の徒は彼等を目するに歐化し

歐風を裝ひコーランに反對する外道なりと罵り、非マホメダンの各種族は彼等を攻むるに青年黨は前に同樞を宣言し全國一致を主張しながら其爲す所を檢するに唯だ國内を土耳其化するに力め吾等の學校の設立を允さず、吾等の宗教の自由を束縛することハミッド專制時代に異ならずとし、而してサルタンを中心とする勢力は猶容易に拔くべからざるものあり、青年黨は四面楚歌の中に越年し、昨年二月に至り陸海軍大臣の任命問題よりキャミル、パシャの辭任となり、ヒルミ、パシャ内相より拔かれてグランド、ヴヂジルとなりしが、此間に於ける反動派の勢力は宮中の一角と結びて守舊の徒を煽動し、アラブ人多數を占むる君府駐在第一軍團兵士の四月の暴動を馴致せり。

昨年四月の暴動

四月の暴動は何れの國の革命史にも必ず一度は來る所謂反動なり、故

て異とするに足らず、青年黨も敢て豫期せざりしことには非らざりしなる可し、此暴動を釀成せしは世間有り勝ちの新に對する舊の反動なりと雖も、之を助長せしめし第一の團體は前述せしサバ、ユド、デンを首領とするリベラル、ユニオン黨なり、此黨は地方分權を主張し、其結果は勢ひ土耳其人中心主義に遠かるべきを以て、希臘、アラビヤ、ブルガリヤ、アルバニヤ、シリヤ人等に近づくの便利を有す、此の如き黨派は必ずしも不必要なるに非らざるも新土耳其の第一に執るべきは先づ國家の統一に在るに於て青年黨が之を邊視せしは無理からぬ次第なり、而して前宰相のキャミルは稍此黨に近づき其子セイドは其機關紙に依り公然青年黨政治に攻擊の矢を向けたり。

次にマホメダン同盟なるもの青年黨の勢力を得し頃より世上に顯はれ來れり、其創立者はイルヂス宮裡の宦官長キス、アガン、次長メジル、アガ、サルタンの一皇子、皇甥等の輩にして無智にして迷信的なる衆民を集むるに黄金を以てし、又コーランを利用して新政に反對の聲を揚げしめたり。

第三には新聞の筆鋒なり、土耳其の如き民智の程度猶低き所に在りては印刷せるものは内容の何たるを問はず非常の價値を以て一般に信ぜられ、從つて新聞の民心に及ぼす影響は意外に強し、然るに悲ひ哉、首都の新聞の多くは宮中より暗に流出する黄金に魔せられ新政に反對するもの多く、又は青年黨に慊たらざるものあり、大新聞と稱せらるゝユニ、ガゼットの如き、イクダムの如き、ウォルカニの如き、セルベスチの如き、皆な青年黨政治を攻擊し以て民心を惑はしたり。

之に加ふるに迷信的のアラブ人に唆はすに或は黄金を以てし、或はコーランの神聖を以てするあり、積鬱の勃發する所、四月十三日を以て一部兵士の暴動となり、君府は恐怖の巷と化し、法部大臣其他青年黨名士の害に遭ふあり、國會に對する威嚇、ソフヰヤ禮拜堂前の勞揃ひ、此間に